
モノローグ～優しい憎悪、甘い涙～

石鍋 壺回し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノローグ〜優しい憎悪、甘い涙〜

【Nコード】

N5601C

【作者名】

石鍋 盞回し

【あらすじ】

ただおさむ
多田治は、独りだった。治を支えるのは、意地だった。そんな彼の周りの人間達。そして少しずつ治は変わっていく。

ブローグ

ブローグ

人間の根っこは善から来るのか。悪から来るのか。そんなこと知るか。

少なくとも俺の根幹を作っていたのは憎しみと意地だった。

思い出せない過去という脆い足場に恐怖し、他人を羨望し、必要以上挫折し、終いには妄執に借られ、すべてを嫌悪し、自分に憎悪を抱き、悲壮に塗れて逃げたくて。でも、意地を張っていた。確かに、俺にはそれっきりだったと思う。

第一話

そつえばよく、思い返せば小さい頃からなんとかだった、なんていう行を聞いたり読んだりする。

で、もう分かつてることだけで俺自身のことを今振り返ってみるなら、それは中学が始まり、と言うことになる。それも、正直もうあいまいだったりする。

俺は中学以前のことを記憶していない。

とても痛かったこととか、衝撃的だったことだけ、無人島のように記憶に浮いている。残りはただそれだけ。何時消えるのかもわからない。

いつか、その話を親戚の医者崩れに聞いたら、記憶封鎖だね。と困ったようにいわれた。

まあ、しょうがないよ、とも。

しょうがない。

親戚はおるか近所に住む人間はみんな知ってる事だ。

もちろん、俺も。だからしょうがないなんて嘘を吐く。だから、ずっと思っていた。

たとえば。

手元に五発、実弾が入った拳銃があつて、もしその弾丸分は法に問われないで使うことが出来るといふ権限を与えられたなら。

四発を使って親父を確実に殺して、残りの一発は自分の口に銜えて確実に脳を打ち抜こうと。

たとえば。

二人の魂を生贄にささげれば、いかなる願いもかなえてくれる悪魔が目の前に現れたなら。

生贄に親父と俺をささげて、残る天然で馬鹿なお袋と、とつと家を出た賢い姉貴と、親父に似ていて嫌いな妹が幸せに暮らしていることを願うだろうと。

親父は、生ゴミみたいな野郎だ。

俺が記憶封鎖になったのは、ガキの頃からの度重なる虐待のせいだ。クソ忌々しくて情けねーことに、PTSDだかなんだかで野郎が拳を上げるだけでこっちは動悸がして眩暈がして体が動かなくなる。指一本も動かせねえで、ただ殴られる。

いつだったかは、いわゆる屈強な大人だったけど、毎日浴びるように酒を飲んで、毎日タバコを五箱も吸っていたせいで、今となったら野郎は末期の糖尿病。中学に入ってから力関係は逆転してるってのに。

こっちがお袋や姉貴がいじめられてるときに間に割ってはいると、それをわかってるせいか道具を使って動けない俺を殴り伏せた。

話は飛ぶけど、お袋は今で言う天然だと思う。

ほわほわして、きつとこんな親父に捕まらなきゃもつとずっと幸せになれただろうとおもっ。勤勉で、家事も仕事も全般にすっかりこなす。元婦警だから正義感も強い。

親父は警察官だ。警察組織の、内面の汚れをぎりぎりまで隠す悪癖のせいで、今でも警察官だ。

何度か、俺がガキのころ殺されそうほど殴られたことがあったりして、近所に通報されていた。だから四十半ばの癖にまだ巡査部長。まあいいか。

話を戻して、お袋とは職場で知り合ったらしい。

九つ年の差がある。だからってわけじゃないけど二十歳のお袋はまんまと騙された。よく、「もつといろいろな経験をしていればあんな人に引っ掛からなかったのに。」と、俺がガキの頃から何度もこぼしていた。一度や二度じゃないからこれは覚えてる。

二十歳で姉貴を生んだから、やっぱり相当早くに騙されたんだろう。親父が豹変したのは俺が生まれてしばらくしてらしいけど。

姉貴が中学生のときストレス性腸炎で一ヶ月も学校を休んだのと、

鬱病を発症したのはすべて親父の言葉の暴力のせいだ。

実際に拳を上げられるのは俺にで、とばっちりはそれを庇うお袋だった。

親父は姉貴にはいつも言葉で追い詰めるようなことばかりいつていた。あとあと軍隊ものの映画を観たら、まるであの時の様子をそのまま演じているんじゃないのかってくらい、心底胸糞が悪くなるくらい、そのままの罵倒が流れていた。ガキの頃からそれを浴びせかけられてた姉貴が鬱病になるのも分かる。

自覚してねーけど、しょっちゅう死にたいと思う、死んでもいいと思う俺も半端に鬱病臭い。

俺が中学三年のときだったか。確か…冬。ほら、大事なことまでアバウトだ。

そのとき、姉貴が家出した。姉貴は高校三年で、通っていたのはそこそ有名な進学校だった。

姉貴は俺が中学で柔道をやっていたのを見て、高校でバスケットから柔道部に鞍替えしていた。そのときの仲間とか、先生がすごい良い人たちばかりで、家にいてもそんなときの話をする姉貴を見るとこっちが眩しいくらいだった。

信頼できる仲間を作って、先生と仲良くなって、それで家出をした。それっきり、会ってない。

連絡先だけは今でこそ知ってるけど、きつと今の俺を見たら、親父の面影を見て取って苦しむんじゃないかって思う。だからこっちは会いに行かないし、それにメールも送らない。ああ、お袋なんかは頻繁に連絡取ってるらしい。

俺が三年になると、妹がおなじ中学に入った。

姉貴から俺が三年、それと俺からは、二年の飛び石で歳が離れてる妹だ。

有理は歳の離れた末っ子。だから親父は一度も妹を殴ることはなかったし、それに罵声を浴びせることもほとんどなかった。少なくとも

もお袋や俺に対してと違って、自分勝手な感情を八つ当たりすることとは一度もなかったように思う。

だから有理のことは、正直大嫌いだった。

虎の威を借る狐だ。何かあれば甘えた声で親父に泣きついて、その都度俺が意味もなくボコボコにされた。どっちが正しいかなんて関係なかった。

親父が言いなりなんだから、それこそお袋には我を通しまくりで、学校に送っていけ、遊びに行くから送っていけ、親父が三交代勤務で泊り込みの日には翌日帰ってきて当たり前。姉貴はもういないし、俺はお袋から一銭も金をもらわないから、しょっちゅう遊ぶ金をせびっていた。

言い草も、いつの間にか親父にそっくりになっていた。だから、俺は有理が大嫌いだった。

とにかく、その増長の仕方はむかつ腹がたって仕方がなかった。だから姉貴と俺はアホかってくらい仲が良かったけど、有理とは寧ろ険悪な部分があった。普通の家族として程度の会話はあったけれども、どこかぎこちない兄妹だった。

巧いもんで、有理は俺が三年間やってきて、姉貴も高校で始めたものだから、乗っかっておけばなんとかなるだろうってこと以外な一ンも考えずに柔道部に入った。俺はもう、珍しく有理の心配をして真剣に止めたけど、聞きやしなかった。

俺はというと中学の三年の夏休みにやっと九九を覚えるような馬鹿ばかりの柔道部にも、柔道にも嫌気がさしていた。てめえら、ヤル気ぜんぜんねえだろ。ってくらい、道場の裏でタバコ吸ったりして時間を潰す不良のたまり場だったから。

少しでも親父に見下されたくなくて、俺が不良になることで殴る口実が出来たと増長されるのが嫌でたまらなくて、俺は意地でも不良たちに影響されるのを拒んでいた。

かたくなに、外見と成績は優秀な、優等生に見えるという足場を堅持し続けていた。

だから、尚更柔道部は大嫌いだった。それでも俺一人が俺のために練習してたら、何を間違ったか顧問が俺を副部長に据えちまって、逃げられなくなった。初段を取ったらとととこんなとこ辞めようと思っていたのに。

案の定、有理にあんまり良くない人脈が出来たのはこのあたりだ。有理はまったく馬鹿だったかわりに、世渡りは巧かったから、連中ともすぐに溶け込んだみたいだった。

第二話

俺は高校じゃ、応用的には帰宅部みたいなとこに入部して校則違反のアルバイトをやった。いよいよ親父の様子もおかしくなってきたし、一人暮らしするにも金が必要だった。いつか追い出されるだろうと思っていたし、そうじゃなくても家を出なきゃならないと思っていた。

この頃から、お袋も離婚を仄めかす事を俺に言うようになったから、早く肩の荷を下ろさなきゃと思っていたのもある。

ただ、俺は姉貴のように素晴らしい人脈も持っていない。そういうのも苦手だった。

だからひたすらバイトして金をためるしかなかった。

将来の夢、なんて学校に通ってれば何度も書かされることだけど、そんなのはまったくなかった。一度、そんなものは無いって書いたら大騒ぎになったから、それからは周りを盗み見て適当に書くようになった。

入った高校は地元のぼちぼちの進学校。普通科。

ここを選んだ理由は地元だから、というだけの理由だった。

正直、俺は口下手で、しかも口が悪い。どこか人相が悪い。これは忌々しい親父の遺伝だ。

その代わり、お袋の遺伝か、勉強は割りと出来た。普通にやってれば三百人くらいの生徒の中で三十番台をキープできた。

本気で勉強すれば、電車で一時間も通えば、三つくらい上のレベルの進学校、それが国立に入れたんじゃないかと教師にはいわれた。

ただ、通いに時間がかかるって理由で全部蹴った

何でかっていうと、バイトが出来ない。一人暮らしの準備が出来ないからだ。

ここぞとばかりにもっともらしい説教を、酔った酒乱の立腹でたれる親父を無視した。

お袋の俺を心配した助言は堪えたけれど、

「俺には夢がねえからいいんだ。とにかく独り立ちを早くするからバイトする。夢ってのは昔から何かを積み上げてる人間が言う言葉で、願うことで、俺みたいなヤツが夢を願うのなんざ傲慢だし、なにより俺は昔のこと覚えてねえんだから、昔に描いた夢なんてもない。今、なりたいたいものなんて無いんだから、俺の心配をするなら姉貴と有理の心配しときゃ良い。俺は何とかなって、そのうちお袋より後に死ぬから。」

と言ったら悲しそうな顔をして、もう何もいわなかった。入学式も終わって一段楽したらとつとバイトを探し出した。見つけたのはモムマートのアルバイト。

適当に寂れていて、客の入りもあまりない。有名どころだと下手したらばれてしまうから困るけど、コンビニってよりスーパーみたいに勝手に店舗改造をしているここには主婦とか老婆しかこない。たまに若い男が来るけれど、そういうのは大概、顔がわれないマイナーなこの店にエロい本を買いにくるだけで、三分もしないで逃げるように帰っていった。

このコンビニでアルバイトをしている若い面子はたった四人で、俺と、俺の三つ上の大学生の杉本裕子さんと、他の農業高校に通う、タメの小川耕太と坂江夏彦。後はみんなおばちゃんのパートだ。なんていうか、おばさんとかおっさんと話していると別に気にしないけど、澁刺とした同年代と話をしていると、節々に、ああこいつはある程度幸せに育ってきたんだな。俺とは、違うな。と思う癖があった。

だから余計に口下手になる。そうすると絡みづらいということと敬遠された。もともと親しい友達はあまりいなかったし……。だから小川も坂江も、しばらくしたらあまり話をしなくなった。

そんな中で、執拗なまでに俺に絡んできたのが裕子さんだった。すらりと背が高い女で、肩甲骨にかかるストレートの髪は軽いシャギー。お洒落でお笑い好きで、何よりも変な人だった。

速射砲みたいに様々な話題を繰り出してきて（特にお笑いが多かった）適当に相槌を打つともう止まらなくなった。だから、途中で「ついてけないですから勝手にしゃべっててください。」っていったらケタケタとさも面白そうに笑って、またしゃべりだした。

しきりに俺のことを聞いてきたから、適当に嘘を吐くと、そのときばかりはなぜかそれが嘘だってわかるらしく、口を尖らせた。

だから、幽かに残るガキのころの痛かったこととか、ショックだったこととかを引っ張り上げて話をした。

幼稚園の頃のこと。卒園式当日に熱出して休んで、何日か後に改めて当日休んだ園児たちを集めて卒園式をやった日のこと。

てつきり俺は一人だけ休んだと思ったら、案外その日に休む園児つてのは多いらしくて十人くらいで、当時の俺にはだだっぴろい体育館で綺麗に整列して証書をもらうのを待った。なんだか園長が話をしてしばらくまって、名前を呼ばれた。

「多田 治くん。」

台に上って、脚をカチカチに伸ばして証書を受け取って、深く礼をした。

ゴチンなんてすごい音がして、額に痛みが走って、顔を上げたら手に持った証書に血がたれた。

園長と俺の間の台（それも角だ）に、深く礼をしすぎて勢い良く頭をぶつけたらしい。園長は血を見てなにやら騒がしくなったが、その後ろでは先生方までくすくすと笑い声がした。

それで振り返ったら、血を流してるのを見たみんなが一転、大騒ぎになった。

とか。

クリスマスにお持ち帰りのケーキを、毎度毎度大事にそればかり見ていたら道路脇のどぶに足を突っ込んで潰してしまっ、三年間一度も無事にケーキを持ち帰ったことがない。

とか。

そしたら、裕子さん大喜びして、俺のことをお茶目さんだとか言い

出した。

「十回ほど死んだらどうですか？まあ、話したのは俺なんすけど。」
っていったら寧ろ大喜び。俺のこと、マイナスイオンを出す癒し系
だとかいいだす始末で、この人はほんとに心底変態だと思う。

それ以来、自分の彼のこととか、学校がどうだとか、それこそ境
目がないだろうくらいの勢いで話をしてきた。

俺も、タメの小川と坂江とは大して話をしないのに、なんとなく裕
子さんとは馬鹿話をそれとなくするようになった。

しばらくして、ああ、裕子さんは友達なんだ、なんてふと思った。
友達なんて、出来ても酔っ払った親父が俺の電話ひたたくてがな
りたてたりするせいで出来やしなくて、だからほんとにいつ以来だ
ろうとか思った。っても、いつ以来なのかなんてことも、覚えてな
いから思い出せねえけど。

第三話

高校二年になって、一際クソ親父が暴れた日があった。放射冷却の寒い日だった。鬼殺しって日本酒を散々飲んで悪酔いした親父が、お袋の髪を引っ張ってまわして、殴っていた。

悲鳴にすぐさま部屋から飛び出して一階に駆け下りた。その光景を見て、思わず、親父に飛び掛っていた。

足を踏みつぶして、横薙ぎに殴り倒したら簡単に親父はすっころんだ。壁に頭を強くぶつけ、呻き、血を流していた。

振り返ってお袋を逃がそうとした瞬間、顔を横からぶん殴られた。勢いあまってぶっ倒れて、振り返ったら部屋の隅に立てかけてあった釣竿を親父は握り締めてた。

昔とった杵柄だかなんだか、親父は剣道で全国区の腕を持っていた。それで滅多やたらに俺を殴り伏せ、出て行け、二度と戻ってくるなと言ってきた。

ああ、そうかい。つぶやいた。

ぎりぎりぎしぎし身体が痛んだ。その鈍痛に合わせてげらげらと笑ってやった。

「強がつて笑ってたって分かってんだぞ。」

釣竿を握り締めながら、改めてみると本当にやせ細った親父は叫んだ。

「よお、いつとくけどよ。俺はお前が入院しようが、死のうが、一切これから世話を見ねえからな。」

親父の顔色が、さっと変わった。俺はげらげらと、笑いが止まらなかった。自分で、自分が狂ったんじゃないかなんて思うくらい嗤った。

この言葉は、親父が、病弱で入院を繰り返していた祖母に育ててもらえなくて逆恨みして、やっと退院した祖母に言った言葉だ。前、親父の妹の知恵利おばさんに聞いた。

それがとつさに口を突いて出たもんだから、親父は顔を青くしたり赤くしたりおもちゃみたいになった。

俺は、笑い袋みたいに嗤いながら、ほんと、心底死にてえと思った。とるものもとりのあえず靴だけ突っかけて、道挟んで五十メートルくらいしか離れてない祖父の家に転がり込んだ。すぐえ寒かった。靴下、穿いてなかったし…薄い寝間着だったから、全身が痛いくらいだった。

親父だけ家に残して転がり込むこともしょっちゅうだったから、俺が行ったら簡単に分かってくれて家に入れてくれた。

しばらく、これこれこういう訳で借りる安アパートを見つけるまではここにおいてももらえないですかと言ったら遠慮するなど、ここにしばらく住めば良いといってくれた。

でも正直に、すぐに出ますと言ったら、祖母は知り合いのアパートがあるからそこをやすく借りられるように掛け合いますよといってくれた。

敷金礼金を考えて、生活に必要な最小限の家具家電を計算したら、今までためた金はすぐに足りなくなった。

モムマートで廃棄になったおにぎりや弁当をもらえたから食費は浮くとしても、月々の家賃と電気代、ガス代、学校関係を差っぴいたら今までためた分はほとんどなくなってしまふ計算だった。

「ほら、ここに住めばいいじゃない。高校を出るまで大変でしょう？」

祖母は優しくかった。祖父は無口な人だった。ため息をしきりにこぼして自分の息子の馬鹿さを呆れている風だった。やはりここに住むように、と言ってくれた。

「じゃあ、もう少し金をためてプラスになったらすぐに引っ越しします。」

そういつて、お袋に頼んで荷物一式必要なものを祖父の家に持ってきてもらった。

親父はと言うと何度かこつちに來たらしいけど、話を聞いていた祖父がすべて門前払いしてくれたらしい。

祖母は居間に布団を敷いてくれた。安心して寝ていいからね。といった。

でもその晩は、いろいろなところが痛んだのと、お袋と有理をあの家に置き去りにした罪悪感でずっと起きていた。有理は兎も角。きつと、お袋はとばっちり食う羽目になってるんだらうって…。

モムマートは朝七時から夜十一時までだった。最後の一時間は深夜扱いになって学生にはやらせられないから、と言う理由で店長と奥さんがやっていた。だから実際に仕事をする時間は五時半から十時までの四時間半。

週六日、土日のどっちか九時間を含めても十万にたらない。

だから、新しく時給の良いバイトを探した。いくつか当たってみて深夜はどうやっても無理だと分かった。普通の店は法律に触れるから深夜には雇ってくれなかった。わかつてはいたけど。

しょうがないからいくつか探し回った結果、夜まででもっとも時給が高かったのが牛井の越野家だった。

最初研修の二週間は時給七五〇円だったが、研修があげると時給は八五〇円になった。つらかったと言えばつらかったのは、適当に話をあわせていたもののテレビなどをほとんど見ない生活だったせいで同年代と話が合わなかったことだ。まあ、例によってしばらくしたら、キャストとはあんまり話をしなくなった。

それから三ヶ月がたって、高校三年になった。

祖父が心配してしきりに俺にたれる説教じみた忠言にも慣れてきたし、二つのバイトを掛け持ちすることになって、そろそろ一人暮らしするのに充分な額が溜まっていた。

祖父は就職した方がいいとか、高卒なら三種の公務員試験を受けろ、だとか言ってきた。ただ公務員試験を受けても、何度か酒乱の親父

の騒ぎで警察がうちに来ているんだから二次試験で落とされるのは確実だと思う。そもそも、親父がクビにされていないこと自体が、警察への不信感を募らせる。

そして、何よりも親父と同じにはなりたくなかった。

普段無口の祖父の忠言が多いのは俺のことを心配しているからなのはわかった。でも、俺は意地でも自分で選択肢を選んできた。

そうじゃなかったら、とうに音を上げているか、気が触れていたであろうと思う。だから、毎度の祖父の言葉は右から左へ聞き流していた。

その頃、祖母が激しく体調を崩してしまった。

祖父はもう七十に近い歳だったが、自分の会社を営業していた。昔は蚕で機織をしていた大会社だったらしいが、最近の企業が中国で安価に服を作り出すようになったためにめつきり不景気になり、借金があるらしい。そのため今でもいろんなところに駆けずり回って働いている。隠居なんて言葉を知らないみたいに。

智恵理おばさんはその会社で働いていて、最近結婚した叔父との間に生まれた幸博^{ちえり}^{ゆきひろ}を、仕事の間は祖母に預けていた。

幼稚園に預けるまでは祖母が昼間面倒を見ているわけだけど、夜は夜で待っていないくてもいいって何度いっても祖母は俺がバイトから帰ってくるまで起きて待っていた。

夜十時にバイトが終わって、えっちら自転車をこいで帰ってきたらもう十一時に近いっていうのに。

だから、もともと身体も丈夫じゃない祖母は無理がたたってしまっただ、ということらしい。祖父が、どう切り出したらいいいのか分からないと言う口調で俺にそう告げた。

その日は越野家のバイトを休んですぐに病院に走った。

「心配すること無いんだからね。おじいちゃん心配性だから。ほら、いつもむつつりしてるから、そのあたりの口調の配分が苦手なのよ。」

病院の、白い作務衣みたいなものを身にまとうてベッドに座っている祖母はそう笑った。

俺は、別に祖父に言われたから決心したんじゃない、最初からそのつもりだったんだということを強調して、家を出ることを祖母にやりわり話した。

家に戻り、祖父にその話をする、もう祖母は電話で祖父にそう伝えていたらしい。祖父は、言い方が悪かったようだと困っていたが、俺は改めて先ほど祖母に話したとおり説明した。

こうして、アパートで一人暮らしをすることになった。

物件自体は随分前からキープしてあったのか、すぐに手続きを済ませることが出来た。巨大な冷蔵庫とかは十数万もしたけれど腰の高さくらいの小型の冷蔵庫は三万円を切るし、リサイクルショップで大概の生活用品をかき集めたら三ヶ月間で随分の余裕を作れていたらしく、だいぶ手元に残りが出た。

苦労したのは引越し業者に頼まないで一人でそれらを二階の家に持ち込んだことくらい。もともと、実家にも本と服以外の俺の私物はほとんどなかったから、新しい家電が大部分を占めてた。

初めてアパートを覗き込んだ俺の第一声は「廃墟だ。」我ながらふざけてる。

ガスの業者がガス開通に来ての第一声は「靴で上がっていいですか？」ふざけんな。

前の入居者がどんだけのものぐさだったか知らないけど、随分と酷い有様だった。

タバコか何かのヤニで洋式の便座は茶色に染まっていたし、カーテンレールまで引っぺがしてたらしくて窓枠の縁がガサガサだ。苦しんで死んだ人間みたいな染みが天井の七割を占め、台所の床はべとべととしている。もちろんどの部屋も埃だらけ。

まあ、分かりやすく言うと、やっぱり廃墟だった。

大掃除に三日かかった。上から下に掃除する、を実行すると埃が雪

みたいに降ってきた。

で、これはどうやってもどうしようもないと思ったものの、きっちり掃除したら「まあ古くて小汚い部屋ですね」ぐらいになった。そんなのでも、やっと手に入れた俺の城だった。

第四話

三年の夏になって変わったことと言えば、モムマートにクラスメイ
トのこれまた変態が来るようになったことだ。元野球部で、夏の大会で引退してから暇になったとかで。

変態、その、原嶋 雄一はモムマートで余裕綽々、レジのまん前の
本売り場で成年誌を立ち読みしている。

迷惑なのは裕子さんと話をしているときに、積極的にその成年誌の
内容がああたとかこうだとか言ってきて、やかましいことだ。

それで、「死ねよ。」「くたばれ。」「ド変態。」「近寄るな不審
者。」「などと、あまりの不愉快さに悪罵を投げつけていたら、参る
どころか雄一は擦り寄ってきた。

そのやり取りを見て、まるで漫才でも見ているように裕子さんまで
喜びだした。なぜか回りには変態ばかりだ。

それで、いつのまにやら悪友として家に上がりこんで人の飯を勝手に
食ってはばからないようになりやがった。

なんせ、休日に目を覚ましたら家の中にこそこそ不審な音がする。
まどろみなんか吹きとんで居間に駆け込んだら、前の日にモムマー
トでもらった弁当をすべて平らげていたりする。兵糧攻めか？ふざ
ける。

雄一は細身で長身だ。顔はえらが張っている。第一印象は魚のハゼ。
調子が良いくて、モノマネが巧い。歌が上手い。

ふざけたヤツだけど、将来俳優になると言う明確な夢があるらしく
て、その話になると二時間は確定で捕まった。アホだと思うけど、
こいつの凄いとこは、俳優になると言うことがどれくらい狭き門な
のかを知ってるくせに、まるで当たり前のように声高に夢をかたる
ことだ。いつも、俺が希望すればマックでバイトすることが出来る、
と言うくらい口の調だ。

嫌っていたのは、大学にいけば良いところに入社できるんじゃないのか？なんていう曖昧な考え方だ。

つまり、子供のように描いた一つの夢を追うことを信じている。学生として学ぶべき、考えるべき時間を過ごすことに無頓着な人間は大嫌いなのだとか。

「それをいうなら、夢すら持ってねえ俺は最も嫌いなジャンルの人間だろう。こいつめ。」

と言ったら、

「なんてゆーか、お前は全部自分でやってもう社会人と同じじゃないか。自立してる。お前が後はもう少し柔軟になればそこの偉人よりよっぽど尊敬する。」

なんて、子犬みたいな、下から見上げる子供のような真っ直ぐな目で言われた。

「……キモイな。なんだそれ。俺のはそんなじゃねーよ。」

ざわざわと、固まっている俺がふやける様な嫌な感覚。認めるわけにはいかなかった。

不愉快じゃないけれど、不安な感覚。

雄一は臭いことを平然と言う。正直、それによって自分に酔っている様に感じるときがある。

ただ、俺が、こいつがいることを認めるのは、こいつは殻を持ってないくせに、芯を持っているからだ。

俺が排他と拒絶と否定と意地で出来た殻で自分を守っているのに対して、こいつはまったく無防備に、柳のように柔軟でいるくせに、その癖、人と人の間を埋めるだけのパーツじゃない。

雄一は、オリジナルだった。

人気者で、馬鹿で、なぜか壊滅的にもてなくて、アホだ。

学校で屯している連中も、夜中に下品に騒ぎ立てている中坊にも、ブランドを誇る子供な大人にも感じなかった感情だが、俺は唯一こいつを尊敬していた。それと、何故かそう思うけれど、雄一もまた俺に対して何かしら敬意を払っているようだった。

高校生の分際で、地元の癖に一人暮らしをしている俺に向けられる様々な色の視線の中で　俺は一際そういうマイナスの視線に敏感になっていたわけだけど　裕子さんと雄一には、一切そういうものがなかった。

特に雄一に関しては、学校でもしよっちゅう俺に絡んでくるようになった。

ただ何故か俺はそれに比例して、雄一を尊敬するのと同じくらい嫉妬して、怖かった。

雄一はその人懐っこさで誰でも仲良くなれた。

だから余計な面倒ごとにも巻き込まれるのだった。その都度、面倒ごとになるのがなぜだか分からないという顔をしている雄一に、一から十五ぐらいまで懇切丁寧に噛み砕いて教えるっていうことが何度、何度もあった。

それをこれこれこういうわけでお前が悪いとか、相手が悪いとか教え込んで、雄一が悪いんならどうやって謝ればいいのかとか。相手がどうしようもないなら付き合いを考えたらどうだとか。

まったく、人事になったら何でこんなに冷静に分析できるのか。てか、俺にそんなことを聞くな、とか思った。俺、お前から見たって友達少ないの丸分かりだろアホ、と。いつも思った。

そんなこんなで、冬を越して春が来た。卒業だ。

それが何の変哲もないものだ、と言えるくらい自然に、雄一やら裕子さんが家に遊びに来た。そんな日々が終わり、まるでアルバイトと日々の暮らしと、それと高三の夏からの数ヶ月だけがすべての学生生活は終わった。涙が出ないどころか、感慨は微塵も湧かなかった。

式でボロボロ泣いていた雄一は俳優の何とかと言う養成学校に合格したらしい。もともと落ち着くなんて言葉が辞書に書いていないほど、サーカスの道化じみたテンションのやつだったけど、このとき

ばかりは危なかった。

まったく参加する気なんてなかったのに、とりあえず無理やり引ッ張られたまま卒業記念のクラス打ち上げに参加。

忌々しく、遺伝で酒に強い俺は周りでの乱痴気騒ぎにイラつきながら、もくもくと飯を食って、ちびちびと酒を飲んでいた。タダってことになってるから、いつとかなきや損だ。

雄一は引ッ張りだこで、いろんなところで浴びるように酒を飲まされてすぐに千鳥足というか這いずるような有様になっていた。

しばらくして、あたり中にギブアップを異常に連呼しながら雄一が隣に倒れこんだ。

「吐くなよ、変態。」

「まだ大丈夫だ。治、二次会行くぞ。」

「はあ？即刻かえって寝ろよ。アル中で死ぬぞ。」

夢でも見てるみたいに、寝転がったまま雄一は空に手をひらつかせた。目の前に金魚でも泳いでるみたいに。

「二次会はお前んちだ。」

「はあ？」

「もう騒ぐつもりはないって。少し、締めはお前と静かに飲む。お前楽しんでねえじゃんかさ。」

「酔っ払いが騒ぐのを見ると嫌な事思い出すんだよ。」

「まあ、もう少しだけ我慢してくれて。」

それで済し崩しのうちに上がりこんだ雄一は勝手知ったるなんとかやら、台所から焼酎を持ってきて、持参のサイダーで割ってすぐさまチューダーを作った。馬鹿みたいな勢いでグラスの半分あおって、背中を伸ばして顔色を変える。

「治さ、これからどうするんだ？どっか就職するのか？」

「さあ。俺もわかんねえ。」

俺の返事に頓狂な声を出して、雄一は残りをあけた。まじめに返事を返さないとお預けだぞ、とばかりに俺の前にあるグラスをひったくる。だいぶ、こぼれた。

「俺、親友って言葉嫌いなんだ。」

ため息混じりにティッシュでテーブルを拭く俺に、雄一は低い声を浴びせてきた。

「他人から友達になる。その先、友達と親友の線引きをするなんて失礼だと思う。女友達と恋人の線引きは分かる。男友達と女友達の線引きもしかたない。けど、親友って区切りを作ったら、じゃあ友達って他人じゃないかってさ。」

「考え、極端すぎだろ……それに何が言いたいのかわかんねえよ。」

「嘘つくな。お前は真剣な話になると急に自分を蔑ろにする。……」

俺はな、治。お前のことを親友だと思ってる。」

「……酔いすぎだ。」

「ああ、酔ってるよ。でもな、何を言ってるか分かる程度には平静だ。それで、普段いえないことを酒の勢いで言ってるのも、分かっているさ。」

ひったくったままの俺の分のチューダーを半分一気飲みする。

「前も言ったけど、お前は視野が狭いんだよ。こうと決めたら一直線だ。もっと柔軟に考えたらどうなんだ？ そんなに自分をいじめなくたっていいだろ？ おい、こっち見る。」

テーブルを拭いてた俺に、言う。

「心配なんさ。お前、ひとりの時はいつも追い込まれたような顔してるしさ。」

じわりと、何かが染み出す気がした。

あんまりにも、その慣れない感覚が忌々しかったから、乱暴に雄一からチューダーを取り返して残りを一気飲みした。

甘ったるくて、安物の焼酎の鼻につくアルコール臭が、胃の中でぐるぐる回った。

「俺も、酔ってるだけだから……クソつまんねえ話をすっけど……今だって、隕石降って来て死ねねえかなあと思うし、明日どっかの誰かが偶然このアパートに放火して、酔って起きない俺を焼き殺さねえかなと思うんだよ。……俺が生きてんのはただ、俺や家族

を追いついたクソ親父に負けたくねえっていうだけのつまんねえ意地だ。アイツ、俺がガキのころから出て行けとかぬかしてやがって、出て行けねえ俺に、意気地なしつつて罵ってきやがった。勇気がねえってさ。」

ははは、なんて自嘲的に笑いがこぼれた。もう、言葉は止まらなかった。

「警察の癖につて、虐待に耐えられなくなったガキの頃あいつに言ったら、首締めて殺されそうになつてな。まあ、お袋のおかげで今もこうして生きてんだけど。アイツ、無趣味で、家に帰ってきたらただ酒飲んで、仕事で溜まったストレスは全部俺たちに向いてた。アイツに残つてんのつて、警察で働いてるつて事だけみたいでさ。俺がガキのころ友達と遊ぶ約束を電話でしたら、電話口で馬鹿と付き合うとか怒鳴り散らしたり、受話器ひったくつたりな。俺も、おかげでガキのころから友達もいねえし、無趣味になつてたよ。まわりじゃ、なんてつたっけか、ミニモーターカーのパーツ組み替えるやつとか、ハイパーヨーヨーとかカードゲームが流行つてたけど、そんなん買ってもらったこともねえし。みんなと同じものもつてないと、仲間に入れないんだよな。今思うと子供つてな残酷だ。」
黙つて、雄一はこつちを見ていた。無駄に、馬鹿みたいに真剣な顔して。

「クソ、話がまとまんねえや。とにかく、自殺したら負けた気がして。でも、無趣味で、友達もいなくて、あとは無駄に遺伝であいつに似てるつて思う自分が大嫌いでさ。意地で、負けらんねえつて高校も卒業したけど、じゃあその高校つて縛りが無くなった俺に何かあるんだつて、何がしてえんだつて考えたらカラッポでよ。大学やら専門に行く余裕なんざねえし、お前みたいに夢なんてねえから行くつとも思わねえし。でも、じゃあ就職したらと思うけど、それもピンと来ない。同じだ。あのクソ親父とまったく同じ。大ッ嫌いなんだよ、俺は、俺を。だからきつと、このままいつの間にか自分でも気付かないうちに消えちまいたい、それが夢なんだよ。俺は擦り

切れたみたいなの、ちつぽけな意地で生きてんだ。多分生きるために生きる機械みてえに。でも、考えても考えてもさ、生きてる理由なんてわかんねえし、……辛い。」

「ムカツク。」

「ああ？」

「ムカツクっていったんさ。お前が、どれくらいそれに悩まされてきたのか、聞いたって俺にや分かんないっつーの。なんてフオーしたらいいかも分からんしさ。ただ、お前がググググぐずぐずしてんのはムカツク。」

「ッ！ テメエに何がわかんだってンだよ！」

「だからわかんねえってんだろ。」

真夜中、一つの怒鳴り声。一つの突き放すような冷めた声。勢い良く倒れたグラスに、罅が入った。甲高い音がした。

「わかんねえけどよ。お前、俺や裕子さんとするんでる時、死にたいなんて面したことねえだろ。お前笑ってたじゃねえかよ。」

雄一は、乗り出していた俺の胸をとんと突いた。

「甘ったれんな。都合の良い時だけいじけてんなよ。お前が先を見れねえのはまだ仕方ないかもしれないけどな、でも人のせいにして死にたいなんて弱音吐くな。自分でやりたいことのために立つのも、自分の足で一箇所にと何か立ち続けんの、どっちも自立だろが。」

……つらいのなんか当たり前だろ！」

最後だけ熱がこもった声を出し、俺を突き放して、雄一は台所に駆け込んだ。グラス一杯に注いだ水を一気飲みして口を拭う。

「……もう帰る。」

「……そうかよ。」

壁に肩を擦り付けながら、雄一は玄関で振り向いた。

「さっきの話の線引きな、きつと腹の底のどろどろした所をぶちまけられるかどうかだと思っくんさ。アホ、死にたくなる前に、もっと早く言えや。うぜえよばあか。……ああ、すつきりした。」

ばたん、と。玄関のドアが閉まった。ゆっくり、雄一が金属製の外

階段を下っていく一歩一歩の音が、アスファルトの硬い音が、真夜中に響いてく。

「畜生……そんなこと……」

ぶちまけて聞いた自分の声の情けなさ。

ずっと前から考え続けて、とうに分かっているやるせなさ。

それでも折り合いをつけれない自分の不甲斐無さ。

負の感情が混然と混じりあい、涙が出た。

「畜生………。」

ドアが閉まった音が耳鳴りになって、いつまでも余韻を残していた。

第五話

それから一ヶ月くらいたった。

あれ以来雄一とは会っていない。朝起きたらいつの間にか上がりこんでいるって事もなかった。養成学校が厳しいのか、或いは。

どっちにしてもこっちは連絡を取らないもんで、雄一の近況は分からなかった。

俺は、という週一度モムマートに入る以外ほぼすべて、毎日のように越野家のバイトに入るようになった。高校を出たって事で深夜にシフトを移行してもらった。このころから金銭的に若干の余裕が出てきた。

店長にはよくしてもらった。事情を知っているわけじゃないのになどこか配慮してくれているようだったし、それに「もしその気があるなら正社員として推薦しようか？」とも言ってくれた。

ただ、いまひとつそれはピンと来ない。きっと、甘えだろうと思うけれど、それでもこんな気持ちのままその好意に甘えるのは、後ろめたい気がした。

モムマートの方はというと、正直なところ辞めようか迷っていたところだった。長く、高校三年間ずっとお世話になってきて、三年になつてからはこっちの都合を聞かずに掛け持ちをすること許可してくれたオーナー店長と奥さんに義理を感じていたけれど、深夜営業のないモムマートの半端な時間帯は身体のリズムを作るのに大変だった。

しばらく考えてから、それを裕子さんに相談した。

思ったとおり彼女はありとあらゆる論調を使って俺を引き止める方向でアドバイスをくれた。それをひとしきり黙って聞いたら、冷静になったのか一つ声のトーンを落とした。

「なんてねー。私が辞めて欲しくないってだけなんだけどね。」

俺と違って、別に後から入ってくる新人アルバイト達と仲良く出来

ないわけじゃないっていうのに、折れて消えそうな寂しい愛想笑いに、曖昧に言葉を濁すことしか出来なかった。

「まあ、また家に遊びに行くから同じかなあ。」

今度はそんな俺のを見て、あっけらかんと笑い飛ばす。

「またさ、原嶋君連れてカラオケでもいこっか。治のモム卒記念で。」

「雄一は……」

「ノリが悪いよ？お姉さん涙が出ちゃうなあー。癒し系の称号、剥奪しちゃう。」

「剥奪してください。でも………そうですね。声かけときますよ。」
「やたー。」

大きく万歳のポーズを取ろうとして、裕子さんはふわりとした白い長袖のずり落ちるのを気にしてた。素肌を晒さない何かのルールなんだろうか？

まあ、奇行やら突飛な言動が多いのが裕子さんだったから、覚えた違和感はすぐに引いていった。

越野家のほうは、月を前後半でシフト分けだった。月末と十五日にシフト表が新しく出される関係で、約束から二週間もたったころやと、俺から雄一を誘ってカラオケの日取りが決まった。

正直な話、俺の方はこの間のことを引きずってるんじゃないかって、雄一に電話するのを散々ためらったんだけど、いざ電話したらあいづ。

「おー。行く行く。」

なんて軽い返事だけ。電話越しの声はこれでもかってくらい軽薄だった。

引きずってたのは俺で……俺が気にしすぎなのか？

酷く癪に障るからぶつきらばうに時間と場所だけ教えておいた。それで当日。

前日の養成学校の打ち上げだか何かで最終電車に乗り遅れた雄一は

たつぷり遅刻するって連絡してきた。日付を間違えて覚えてたとか。ああ、あれだけ軽かったなら覚えてないだろうさアホ雄一め。

このままだと時間単位で待つことになるって言うんで、先にはいつてることになった。

俺はアイスミルクティーで、裕子さんはたしかクリームメロンソーダを頼んでた。

一曲ずつ歌っては何か取り留めのないことを話して、そして思い出したようにまた曲を送信して歌う。そんな感じだ。

「あのさー、クリームソーダシリーズはこっちのテクニックをリサーチしてるんだとアイスインク。」

また、何を突飛な…という話題の転換。そもそも、ソニンやら東京事変の鬱ものを歌った直後に脈絡なく。

一般人の俺と違って、やたら歌が巧い裕子さんや雄一がしんみりした歌を歌うと空気が変わるってのに。

それぞれが数曲歌ったところ、二杯目のクリームコーラが届いた。

裕子さんは獲物を前にそう言って、スプーンを一度口に銜え、腕まくり。戦闘体勢になって腕を回す。

「はしたないですよ、裕子さん。」

「そうだけどー。治が許してくれるなら問題ないでしょ？ハシタナイのはやだ？」

「もう慣れました。」

そう、じゃ良かった。なんてけらけら笑う。

「それでこれって炭酸ジュースにアイス沈めちゃうと泡になっちゃうでしょー？でも適度に下のジュースを絡めたいじゃん。このアイスについてジュースが凍ったみたいなの美味しいしー。」

「あー……」

俺は、ピントのあつてない返事を返した。そういえばクリームソーダって食った事がなかった。少なくとも覚えてる間には。

「それでさー、このアイスの下の水の浮力をいかに活用するかが腕の見せ所だと思うの。こう、アイスのスプーンで掬う時にこうやっ

て……ほらこんな感じ。」

クリームソーダ類の食べ方の失敗がどんなのかわからないけれど、裕子さんは満足の行く捌い方を出来たようで、やたらうれしそうだった。

「あー……なるほどー」

水をさすつもりはなかったけれど、なんていっていいのかわからなくてまた気のない返事をしていた。

「よし、もはや私が教えることはない。治は今からクリームソーダ免許皆伝じゃ。」

「それは、辞退します。」

「そんなこと言うなよー。ほらこのアイスクリームあげるから。」

「ちよつと……待ってくだ……裕子さん」

口元にスプーンを突き出して、裕子さんは悪戯っぽく笑い始めた。さっき裕子さんスプーン舐めてたし、こっちが慌てるのを分かっているんだろう。

「あははははは……」

何故か不意に、追いかけてきた笑い声が寂しげに聞こえて後頭部が冷たくなった気がした。俺は裕子さんの手首を握り、やっと止まったスプーンに一度深呼吸。

「そういうことは……。」

何度も聞いて覚えてる。裕子さんの彼は、決まって十時過ぎごろにモムマートに来る、柔和そうな人だ。背はやや低めで、商品を受け取るときに人懐っこい笑顔で礼を言っていく。裕子さんが、言うのではないでも一言二言話しかけて来ることもあったくらいだ。名前は松沢まつざわ正義まさよしさん。

裕子さんが言うところの、癒し系。思うに、彼女が言う俺と違って生粋の。

それを思い出した。

「……松沢さんにしてあげてください。」

笑い声が止まって、握っていた手がびくりと震えた。裕子さんはそ

れから一度、ごめん。とつぶやいた。

「少し、はしゃぎ過ぎちゃった。」

裕子さんは、すい、と逃げるように視線を泳がせた。いくら俺が鈍くたって、分かる。

「裕子さん……。」

溶けかけたアイスクリームがスプーンからたれた。

思い出し、握っていた手を緩める。白く、細い手首があらわになりそこに刻まれている何本もの線に気がついた。

伽藍と頭が白くなり、ソニンの曲が、東京事変の入水願いの歌詞が蘇った。

「ッ痛っ！」

俺が思わず強く握った痛みで、テーブルにスプーンが落ちた。きんからから、なんて。

「裕子さん！なんで……」

ボックスの扉が勢い良く開いた。間延びした、全く悪びれた様子なんてない雄一の挨拶とも、謝罪とも雄叫びともつかない声が響く。

「あれ？なんだこの空気？俺失敗したか？」

「いや……」

ああ失敗だ。と思う反面、おかげで混乱する頭に怒りが満ちなくてよかったなんて矛盾したことを考えていて　その自分に嫌気がさした。

「原嶋君遅いぞー。あはははははは、ふざけて治にアイスをあーんしたら怒られちゃったー。」

裕子さんはこともなしという体で、俺が雄一に気を取られている隙に、するりと手をひっこめる。腕まくりを戻しふわりと袖で手首を隠してテーブルのアイスを拭いた。

「なにぃ！？裕子さん俺にもお願いしますよー。」

「ダメー。さてやっとオールスター勢揃いだね。仕切り直して私からいくよー。」

そして入ったのは大塚愛のHAPPY DAYSだった。すぐさま

リズムミカルな音楽が始まる。
それから底抜けに明るい歌だけを、裕子さんは続けて歌った。
終わりの時間まで、ずっと。

蛇口を目一杯捻って水を流した。ざあざあと飛沫が飛び散ってかすかに服を濡らす。

料金が安い代わりにお世辞にも立派とはいえない設備のせいで、他所の部屋からここまで歌声が漏れ聞こえてくる。音程が無い絶叫と演歌。うるさい。

時間をかけて手を洗う。

あれから何度目になるのかも分からないトイレだった。

裕子さんの歌はまるで、大声を上げて泣きたいから一際声高にアツプテンポの曲を歌っているようにしか聞こえなかった。

雄一が得意の恋愛バラードを聴いて、拍手と歓声を上げているときは、こっちは悲鳴を聞いているようだった。

視線を上げると、目の前の鏡に自分の顔が映る。

酷い面をしてるな、と心底思う。

水を掬い、顔を洗う。まったく変わらない自分の顔がむかついた。

拭いて、頭を振った。トイレを出ると会計を前に俺を待っている二人がいる。

「遅いぞ。待ちくたびれて延長しなくなっただけだ。」

「いいねー。また延長しちゃう？」

「いや、今日は。」

雄一は俺のやや低いトーンに気付かず、残念そうに文句をもらした。

「しょうがないねー。じゃ、また来よーね？」

「もちろんっすよ。」

「またメールする。……裕子さん、送っていきます。」

裕子さんは一瞬困ったように苦笑してから、悪いよー。と言った。

「裕子さん、最近物騒ですから治に送ってもらった方がいいっすよ。なんなら俺もついてきますし。」

「いや、お前原チャリだろ？裕子さんも俺も歩きだから平気だ。」

「そか。わかった。」

「うーん……治？迷惑じゃない？早く帰りたいんじゃない？」

わかってる。アカルイウタしか歌わなくなったのも、蒸し返したくなんてないからだってことくらい。

ただ、一曲一曲裕子さんがアカルイウタを歌うたびに、こっちは言わなきゃ我慢でなくなっただ。ってか、そういうつもりで選曲かとさえ思う。俺はまんまと頭にきていた。

はたと、視線を雄一に向けた。そんな俺に気付いてからきよんとして。

「なんだ？俺の歌が巧かったからって惚れちゃいかんぞ？」

「とりあえずお前は死ぬ。」

雄一はあの時、こんな感情と折り合いをつけたのか…。

小さく細い深呼吸を一度した。

「ぜんぜん迷惑なんかじゃないですよ。俺夜型ですし。」

「……じゃ、お願いしちやおっかなー。」

裕子さんは屈託なく笑って、そう言った。

女の子が喋るバイクと旅をする小説の、そのバイクに似ていると選んだらしいYB-1にまたがり、雄一はひらひらと手を振った。すぐに影が見えなくなる薄曇りの夜に、軽いチャンバーの唸りを残して帰っていく。

「俺らも帰りますか。」

「うん。」

しばらく、黙って並んで歩く。情けないことに、アレだけたくさん用意したはずの言葉がどっかに消えてしまっている。

裕子さんは可笑しな人で、底抜けに明るくて、思い返せばいつでも笑っている人だった。マシガンのようにしゃべり続けて、でもなんだかんだで聞き上手でもあって、少なくとも裕子さんは…。

「ごめんね、治。」

「、」

先に口を開いたのは裕子さんだった。

第六話

とつさに、返事が出来なくて息が詰まった。

「ごめん。心配かけちゃったみたいでさ。」

「なんで…。」

少なくとも、裕子さんは俺のような場所まで落ちちゃいけない女性のはずなんだ。死ぬだの死なないだの、そんなことを考えちゃいけない人のはずなんだ。

「別にね、自殺しようとかじゃなくって。たださ、落ち着くの。」

『落ち着く』

体が震えた。

自分が嫌いで、延々と自分を責めて、自分を呪って、自分を拒絶して。自分を傷つけて、それで落ち着く感覚。

はたと一人で振り返ったとき、酷く身近にその感覚がある。吐き気がするくらい、俺にも分かる。

「錆びて、切れないような剃刀で引っ搔いてるだけだから、自殺とかそういうんじゃないの。本当に。」

だから、安心して。とでも言いたいのか。

「ふざけ、ないでください。自分を傷つけて落ち着くなんて。」

そう、そんなのは自殺と同じだ。

自分を傷つけて、血を見て、自分が自分を否定し、殺したことに安堵を覚えている。

眉根をひそめて、裕子さんは言葉を選んでた。ぽつり、ぽつりと言葉を繋ぐ。

「ふざけてなんて無い。だって…正義に、婚約者がいてさ。」

心が、松沢さんに残っているから。

「もう私が付き合い始めたときにはいてさ。」

だから、それでも松沢さんを正当化したいなんて事を考えるから。

「きつと、正義は遊びとか冗談で私に声をかけたら、私が勝手に好

きになっちゃってさ。」

たった今、彼女が口に行っているこの言葉すら、錆び付いて余計に良く切れる剃刀だった。

「だから私が悪いから……」

「違う!!」

とつさに体が動いた。裕子さんの双肩を、つかんでいた。

「治……痛い、よ。」

裕子さんは苦痛に顔をゆがめ、顔を伏せて目をそらす。

あの日のデジャヴをみているようだ。

「こつちを見てくださいよ。」

頭の隅で、冷めた考えが浮かぶ。

一体俺に何を言う資格がある。俺だって死にたがりだろ。雄一の真似しているだけだろ。

「……痛いよ治。ごめん、怒らせてごめんね。……だから放して。」

所詮、眩しい雄一のようになってみただけだろ。迷惑だろ。わかっているはずだ。俺だってあの時雄一をつっぱねたじゃないか。

肩をつかむ手を緩められなかった。

自分の中を覗き込んでも、裕子さんを救えそうな言葉が見つけれなかった。裕子さんが言うところの『怒り』があるとすると、自分の無力に対する怒りだった。

「松沢さんが裕子さんを口説いたんじゃないですか! 婚約者がいるのに黙っていたんじゃないですか。悪いのはあっちじゃないですか!」

ここに来て悪人探しかなんて馬鹿。違うだろ。

「……正義を悪く言わないで。」

「嫌です。じゃあ、こつちを見て言ってください。その言葉が本気なら、本当に自分が悪いって思ってるなら俺を見て言ってくださいよ!」

本当は、もっとちゃんと励ましたかった。

松沢さんへの嫉妬か。

本当は、裕子さんを抱きしめたかった。

まるで親父が拳を振り上げているときのように、女々しくて情けないことに体がびびっていた。

「俺、裕子さんが……」

何時だって、まどろみの泥沼の中を歩いているようだった。どこまでも続く真っ暗なトンネルだ。すべてがどうでも良くて、リアリテイなんて無くて、自分を含めてすべてがくだらないと思ってた。俺を除くすべてがトンネルの外だった。

それは、家を出たって同じだった。

一人でずっと考えてたって、出口なんて無かった。じめじめと自分の殻の中で想いが回り、どんどんくすんでいくだけ。より粘着質をまし、どつぷりと自己嫌悪に浸る羽目になるだけだった。

独りじゃ、自分すら救えない俺を助けてくれたのは、他でもない裕子さんと雄一だった。

トンネルの壁をぶち抜いてきたのは彼女だった。

多分素でだろうけれど、何度も何度もハビリのように声をかけてきた。つつけんどんな返事にすら。

何度も松沢さんのことを聞いていたから気付かないふりをしていたけれど。

「本当に、……心配なんです。」

言葉は剃刀だ。

「裕子さんのこと、親友だと思ってるから。」

嘘だ。ずっと本当に護りたいと思っていた。きっと、女性として、異性として、愛おしいと思っている。

ここに來ての自虐か。

「全部背負い込んで、自分を傷つけて……心を殺している裕子さんを見たくなんてないです。」

裕子さんの心は、松沢さんに残っているから。

「彼を悪者に出来ないなら、自分を赦せないなら、俺が裕子さんを赦します。裕子さんは悪くないって、何度でも言えますから。」

きつと、俺の想いは重荷になるから。弱った気持ちで俺に寄りかかった自分のことを、いつか裕子さんはまた責めてしまう気がするから。

「だから、自分を責めないでください。」

岩みたいにギシギシいう指を、やっと裕子さんの肩からはずした。

裕子さんは手首の痕を見つめ、静かに、しばらく泣いた。ダイヤモンドか真珠か。そんな透明な涙だった。

再び、黙って並び歩いて五分ほどしたころ。

「ねえ、治。」

もうすぐ裕子さんの家が見えるというところで、口を開いたのはまた裕子さんだった。

「なんですか？」

「これから治んちに行ってもいいかなー。」

「駄目です。」

「すこし、お酒飲みたい気分なんだけど。」

「親父さんと飲んだらどうですか。」

自分でも驚くほど、冷たい投げやりな声が出たと思った。

「治と飲みたい。」

「俺は飲みたくないです。」

「つめたいなー。治つてば癒し系なのにー。」

「俺は癒し系なんかじゃない。俺に松沢さんを見てるなら、やめてください。」

「っ……………」

「じゃあ俺帰……」

肩を引かれ体が開く。がちり、なんて音がした。

「痛ってえ……」

「んっ、失敗したー。」

不意打ちで唇を合わされた勢いで、裕子さんと齒がぶつかった音だつて、少し遅れて気がついた。

「何を…っ」

「ねえ、治。さっきさ、好きって言いそうになってたじゃない。」
口に血の味が広がった。唇が切れたらしい。つきり、と痛む。

「今晚、泊まりに行っちゃ駄目かな。一回だけでもいいからさっ。」
裕子さんはそんなことを、言った。

愕然とした。訳がわからなかった。さっきの涙はなんだったんだ。
「私さ、治のこと、好きだよ。」

だからそれは勘違いだろ。気が弱ってるから、そう思うだけだろ。
裕子さんの薄笑いと、赤い唇の生々しさが、酷くグロテスクに思えた。

「いい加減にしろよ！！何でわからねーんだ！」

さっき抑えたはずの激情が今更爆発したようだった。反面、裕子さんにどれだけ嫌われようと、悪罵を投げつけることで自傷行為を思いとどまるなら、それもいいかなんて冷めたことを考えた。

「不安だからって今度は俺を剃刀代わりにする気なんだろ！！ふざけんな！」

まるで、今にも薄ら笑いさえ浮かべそう目で、裕子さんは激怒する俺を見つめている。

「癒し系なんて自分でつくった嘘に踊って、自分を責めることが馬鹿馬鹿しいって何で分かってくれないんだよ！」

終わると思った。最後まで言えば、俺を救ってくれた絆は簡単に切れてしまうと思った。

「俺が好きだったのはそんな裕子さんじゃない！ウザいんだよ！！」

「…あはは、私のことなんてろくに知らないくせに…っ。」

「知らねえよ！そんなん知りたくもねえっ！全然魅力的じゃねえよ！」

「、彼女も居ない童貞の癖にっ……！！」

「そんな歪んだ『好き』に付き合わなきゃならないなら童貞で充分だ。」

「アハハハッ！強がってっ！ホントは勃たないんじゃないの！？」

インポヤロー!!」

「今のアンタじゃ勃つわけねえだろ！超ウゼえ！」

ああ、これで終わりだな、なんて静かに思った。

「そんなことだからあんな男に騙されたんだ！いい加減目を覚ませよ！」

ばぁん、という音。強烈なビンタをもらった。

頬が熱い。ただ、ささくれ立ったざらつく気持ち、滑らかになっ
ていく気がした。頬の痛みと反比例で茹だった頭の熱が引いていく。
全部、終わったんだ。

結局、俺と雄一はまったく違ったわけで、俺には裕子さんを救うこ
となんて出来なかったってだけ。

ふふ、なんて笑っちゃった。

「あーあっ!!」

裕子さんは急に伸びをして、大声を上げた。

「治、たった今、癒し系剥奪だから。あー……綺麗にこれでもかつ
てつられちゃったー。」

憑き物が落ちたような、予想外に爽やかな声だった。

「さっぱりしたー。」

裕子さんは踊るように、ステップを刻んで俺から離れる。

「残酷だよ、治は。癒し系なんかじゃない。」

その口調で分かった。裕子さんは

「……………気付くの、おせーです。」

「ばあか。治のばあか。」

「わかってますよ、そんなん。でも裕子さんも、馬鹿みたいに不器
用過ぎです。」

「……絶対後悔するから。あのウソツキ男も、治も。」

にこりと、小悪魔のように笑った。そう、裕子さんはその笑顔が魅
力的だと思う。

「私、尋常じゃないほどいい女になっちゃうんだから。」

「……………無理なほうに賭けます。」

「ばーか。でもね、治のザンコクなとこ、ホントに嫌いじゃないよ。」

ありがとね。やっと折り合いがつきそうだよ。
くるりと背を向けてから言った。裕子さんは手を振って、そのまま振り返らずに家に帰っていった。

始まってもない、初恋の終わりだった。

「……嫌いじゃない、か。」

カラッポの声でふと、思い出した。さっき自分は雄一のように、なんて思っていたこと。

頭を掻いて、ため息を一つ。

「なんだそれ。雄一になりてーのか？俺は。……馬鹿か。」

鼻で笑い、足を家へと向けた。

第七話

梅雨が明けた頃、モムマートを辞めた。晴れて越野家の深夜バイト一本に絞ることにした。

あれから裕子さんはしばらく手首を隠す服を着ていたけれど、しばらくしたら手首を普通にさらす服も着るようになっていた。

俺が気にしているのに気付いて、もう大丈夫だってー。なんて頬を膨らませたりした。

少なくとも、話をする限り以前と同じように見えた。相変わらず勝手に家に侵入もするし。

やっとこの頃になって分かってきたのだけど、どうやら雄一のやつは本気でハードなことをやっているようだ。どっかで聞いた適当な学校じゃなくて、雄一のところは何人も本物を輩出しているところだ。ダンスどころか日本舞踊の分野までやるらしい。

ずかずかと家に上がりこむ人数が減ったおかげで、少しばかり睡眠時間が増えた。少し退屈にはなったけど。

しばらく、何の変哲も無い平坦な毎日だった。変化があったのは蝉が最後の力を振り絞って鳴くようになったところ。

お袋から祖父が入院したというメールが来た。

うちのアパートに空調は無い。その土曜日はもともと暑さに強い性質の俺でも、頭にお絞りを乗せ、扇風機にかじりついていたのを覚えてる。ピークを超えたはずなのに本当に暑い日だった。

すぐさま店長に連絡し、夜のバイトを休ませてもらった。

正確には一週間ほど前に倒れたらしいが、お袋もばたばたとしていたため俺への連絡が遅れたらしい。天然だからってそこらへんは本当にきちつとして欲しかった。

準備を済ませてから祖母に電話を入れた。病院にいるのか電話は繋がらなかった。お袋にメールを送っても返事が無い。祖父の病状は

結局どうなのかわからなかった。

何か、見舞いの品を持っていこうと思い、途中の八百屋で果汁百パーセントのジュース詰め合わせを買った。もし食べられない状態でもこれならある程度日持ちもするし大丈夫だろうって。

病院の場所は分かっていた。俺が暮らしているアパートからたいした距離じゃない。自転車で、十数分だった。

自動扉をくぐり、正門のところで手をアルコール消毒させられた。

ロビーで病室を教わり、突き当りの病室に入る。ベッドがいくつか並んでいる最奥、窓際のベッドにネームプレートがあった。

消毒の匂いが、鼻についた。

祖父が横になる枕の横には、見たこともない機械がおいてあった。

コードと、チューブのようなものが何本も走っていた。いったいどんな状態なんだ、祖父は。

「多田さんは、今リハビリ室にいるよ。」

ベッドの向かいのお爺さんが声をかけてきた。振り向き、ありがとうございます。と礼をいった。

ベッドの横にすたえられているテーブルに、見舞いの詰め合わせを置いて、リハビリ室に向かう。

ロビーと、祖父の病室のちょうど中間あたりに、リハビリ室があった。入り口に近付いただけで、中の様子が見て取れた。

比較的、このリハビリ室にいる患者は歳をとっているようだった。ふと見渡しただけで、車椅子に乗っているような老人ばかりなのが分かる。

ここに、祖父がいるっていうのが信じられなかった。

祖父は俺よりも更に十センチほど背が高かった。写真を見せてもらったことは無いけど、きつと若い頃はハンサムに違いないという、精悍な顔立ちの爺さん。それが俺の印象だった。笑点の桂歌丸を凛々しくして、巨軀にして、毛を増やした感じだ。

家にお世話になっていたときは、昼間たまに仕事の手伝いをしてい

た。そのときも、百数十枚スラックス生地を重ねた束を、両手に一個ずつ持っていた。布と言えども大体十五キロほどはある。

配送では一日何十キロ、ともすれば百キロを超える距離をハイエースで走り回っていた。汗をかけば、ペットボトルのコーラを好んで飲んでいた。

七十を超えてもそんな祖父だった。

「どうかなさいましたか？」

入り口に突っ立っていた俺に、リハビリルームから男の看護師が質問してきた。

「あの、多田^{ただ} 豊次^{とよじ}が入院していると聞き、見舞いに来たのですが。」

俺の返事に、ああ、と小さく頷いて、その看護師は膝ほどの高さのベッドの方を案内した。

「今マッサージを受けているところですよ。大丈夫ですから行つてあげてください。」

「すみません。」

会釈を返し、ベッドに近寄っていく。上に覆いかぶさるようにしてさつきより大柄な看護師がマッサージをしているのが見える。

少し近付いて、看護師が抱えている祖父の足を見たとき、ぎくりとした。

看護師の脇から背に向けて見えている、祖父のふくらはぎから先だけを見て祖父の状態が分かってしまうほど、その足は細くなっていた。

「治か……」

衣擦れのような小さな声。数秒して、看護師の影からこちらを見ていた祖父の声だとやっと気付いた。

「うん。お見舞いに……」

止まっていた足を必死に動かす。次第に見えていく祖父の寝間着姿。血が氷水になったみたいだった。

祖父はかつての、俺が抱いていたイメージとはかけ離れた姿だった。

病室にあった装置と同じものから、チューブがのびている。鼻から肺へチューブが入っていた。

看護師は丁寧な、足をマッサージし、足を持ち上げたり曲げたりしている。満足に動かないからだが硬くなってしまわないように。

もともと歳相応に痩せている祖父だったが、まるで本当に骨の上が皮一枚になってしまったようにやつれている。

目も、つかれきっているようで。今にも消えてしまいそうなほど弱弱しくて、俺は不意にこみ上げる感情を抑えるので必死になった。

「ありがとうなあ。……もう少しで終わるから、椅子に座っていてくれい。」

見るからに満身創痍の祖父は、チューブが邪魔なせいか少し曲がった笑顔を見せた。

五分ほどのマッサージのあと、補助器にもたれながら床にある黄色い楕円のラインに沿って歩いていった。一周十メートルほどのライン三周、それだけに二十分もかけて。大丈夫だと、額に汗を浮かべながら、こっちに笑顔になりきっていない笑顔を向けて。

終わって車椅子に乗り換え、病室へと移動した。俺が車椅子を押すことを、祖父はしきりに気にしていた。

「そんなん気にしないでくれって。」

そんな俺の言葉にも、曖昧に笑っただけだった。満足に体が動かないぶん、余計に心が弱くなっているみたいだった。

病室に着くと、ちょうど祖母がもどってきていた。ベッドの近辺の掃除などをしている。話を聞くと、いつもこの時間にリハビリが終わるからその間に洗濯などを済ませていたらしい。

祖母は慣れた手つきで祖父の脇に腕をいれ、あっという間にベッドへ移動させた。

思い返せば、しばらく祖父の家には顔を出していなかった。お世話になったあと、夕方と無く深夜と無く毎日バイトに入っていたから、昼間は休みでもなければ動けなかった。

まして、モムマートを卒業してからこそ夜型に変わっていた

ため、車の教習以外では実家方向に出なかった。

だから家を出る頃の、体調を崩した祖母の様子と元気な祖父と今の、対極的な二人のギャップに、なんだか凄い違和感を覚えた。

「ありがとなあ。久しぶりで……こんな格好では情けないが。」

祖父は目覚めたてのフランケンシュタインのような緩慢さで、襟元を直した。

「まったく、昔の人だからこんな時も見栄はっちゃってねえ。」

ぜいぜいと呼吸の音が響く。チューブの先の機械が、小さく唸っていた。それにかき消されそうなほど祖父の声は小さい。

「肺炎で、肺に水が溜まっちゃったのよ。」

祖母は病院慣れしているせいか、てきぱきと祖父の身の回りの世話をしている。

「もう、長くは無い。」

「まったく、弱気になっちゃって。そんなに大変な話じゃないわよ。」

叱咤するような、責めるような、そんな激励の声だった。

「そうだって。トヨジいは同年代に比べても仕事して、マッチョだったしさ。すぐ良くなる。」

仕事、と言う言葉に反応して、小さく祖父は体を揺らした。ああ、と唸ってしばらく黙り込み、そして。

「御礼をしなきゃだからなあ。」

祖父はぽつりとこぼし、俺はその電撃に貫かれた。

なんでだよ？

無意識に目を伏せてしまっていた。真っ直ぐに祖父のことを見れなかった。

満足に体を動かすこともできなくて。肺に水が溜まってしまいいつも苦しくて。

とても高潔なものを前に、自分がそれを見るのをはばかれるほど矮小な気がした。

心も疲れて弱ってしまっているっていうのに。

なんで……そんな言葉をつむぐことが出来るんだろうと、思い。弱
りきっている今祖父が言った言葉こそが、祖父を形作る芯からの言
葉であるような気がした。

胸を打たれ、昔からずっと自分自身の平静を保とうとしていたタガ
に罅が入った。

「……トヨジージュース好きだろ？…さすがにコーラってわけには
いかないからさ、百パーセントのやつ持ってきたんだ。」

別の言葉を何とか搾り出した。喉ギリギリまでこみ上げ、溢れそう
になっていた濁流を必死に押さえ込んだ。油断したら途端に涙が出
てきそうだった。

「おじいちゃんは今飲めないから、私たちで飲んじやいましょう。」
冷蔵庫からテキパキと氷を用意し、コップに二杯グレープジュース
が注がれた。

「氷を入れたら折角の百パーセントも薄くなっちゃうわね。」

俺の雰囲気を読んだのか、祖母は甲高い声で小さく笑った。祖父は、
わしの分もちゃんと取っておいてくれよ、と低い声で愚痴った。

「治。」

一口俺が呷った時、ベッドの上で再び小さく居住まいを整え、祖父
は真っ直ぐにこつちを見つめた。

「……どうかしたん？」

「わしももうこんなだからな、小言を言うのも最後になるかもしれ
ないが……わしは治が就職しないのが心配だな。」

「まったく、こんな時にまたお説教なの？それにまた弱音を吐いち
やって……ねえ。」

「お前は黙っていてくれ。治？」

真っ直ぐにこつちに向いている、皺くちな顔が、その双眸が、そ
の説教が、心底俺のことを心配しているためのものだと、始めて素
直に見つめ返すことが出来る気がした。

「……うん。」

親父の、心配よりも酔った勢いの腹いせの口実じゃない。

今まで、そして今、祖父が紡ごうとしている言葉はすべて、厳しい人生の先輩として道の一つを指し示すための苦言だったのだと、やっと気付いた。

「少し厳しいことを言うが……夢と言うのは胸に描いたときから積み上げ、その為に力を蓄えたものが謳うことを許されているものだ。」

分かってている。夢を実現する頂に到達するためには、様々な犠牲を払い全力で何かを積み上げていかなければならないことは。例えるなら夢というのは、ピラミッドのようなものだと言うことは。

だから、子供の頃の痛みを伴う記憶とか、ショックだったこととか、親父の虐待しか覚えていない俺には、夢なんてものは無いし、描く資格もないと思っている。

ただ、俺のそんな想いとは別の次元で、今の祖父の言葉を遮るわけにはいかなかった。

「うん。」

続けてしゃべることも苦しいに違いない。祖父は乱れそうになる絡んだ呼吸を必死に整えている。

「子供の頃になりたいと思う夢、学生の時分に描く将来、仕事についてから新たに目指す目標。今、治に目標が見つからないと言うのは、わしからしたらどこか甘えがあるんじゃないかと思う。」

「……。」

「夢や目標は作るものだ。どんな仕事だろうと、何年も勤めて次々に自分で作っていくものだ。」

ぜいぜいと、痰の絡んだ呼吸音がどんどん大きくなっていく。

「……うん。」

今の祖父は折れてしまいそうなほど弱弱い。その声もまるで蚊が鳴くほどのもの。しかし、それは低く唸る暴風を無理矢理小屋に押し込めたようで。

肌が粟立つほど鬼気迫る声だった。

「治が自分でどうにかしようと必死に立つのは立派だと思う。しか

し、立つだけで必死になつて前を見られないのはいけない。治には、前を見て自分で目標を立てて実現しようとする努力が足りない。治の悩みの原因は知っている。だが、もうそろそろそれに寄りかかって、甘えるのは止めるべきだ。言い訳をやめろ。仕事をしろ。そして学べ。どんな仕事も、どんな人生も、年数を経て見えてくる側面がある。」

いつの間にか、祖母は祖父の背をさすっていた。俺が目逸らすまいと必死に、真っ直ぐに見つめ返している視野の端で、静かに目を閉じたのが見えた。

「……負けまいと歯をくいしばるのも重要だが、時には力を抜いて友を頼れ。信用できる友達よりも、信頼できる友達を作れ。自分に向けているその強い力を、少しずつでも人に分けられるように心がけるんだ。」

長く長く息を吐いて三度。祖父はこわばらせていた体をゆっくりと弛緩させた。

「がんばれ、治。」

「……はい。」

「まったく、嫌ね。歳をとっちゃうと説教が好きになっちゃって。治、そろそろおじいちゃん休む時間だから」

「わかった。」

体が、妙にふわふわした。まるで座っていた椅子の上だけ重力が強かったようだ。立ち上がった、緩慢な動きで椅子を寄せる。

「トヨジい、……ありがとう。」

祖父はむうと唸って咳払いをした。おじいちゃん照れちゃってねえ。なんてくつくつ祖母が笑う。

「また来るよ。」

「ありがとねえ、治。」

祖父の代わりに祖母が返事を返した。凸凹というか、阿吽というか、祖父と祖母は素敵な組み合わせだと思う。

最後に祖父のマッサージをしていた看護師に挨拶をして、そして病

院を後にした。

夜になり、そういえば夜勤を休む必要はなかったと思いながら、ぼんやりと街を歩いていた。眠れなかった。夜だからって家に籠っているのがもどかしくて。

昼間の祖父の言葉は鋭く俺に突き刺さり、繰り返し遠雷のように耳に響いていた。

「甘えるな。言い訳をやめろ。仕事をしろ。学べ。」

銀の砂子を山と盛った白銀の器が、ぽつんと空に浮いている。まだ暑いつていうのに、まるで冬のように月がくつきり良く見えた。

「信頼できる友を作れ。」

あの言葉は、どれも重たい言葉だった。

思い起こすなら、それに比べて俺を護っていた殻のどれだけ薄っぺらなことが。

あの親父への憎悪は、自分を諦めるためにこれ以上無いほど、甘く優しい憎悪だったことが。

「ああ、クソ。」

月が綺麗過ぎて、涙が出そうだ。

俺は、親父のせいで今まで何を取り落としてきたんだろう。

俺は、俺のせいで一体どれほどのものを見落としてきたんだろう。

自己嫌悪に陥るのは安易なことだと思った。自分を不幸な人間にして、かわいそうな人間にして、諦めるのはたやすい。

「がんばれ、治。」

短い励ましたった。

「がんばれ」

祖父のたった四文字のコトバ。たまらず、涙が出てきた。マズイと思ひ脇道にそれて小さな公園に転がり込んだ。

視界が歪む。必死に視界を確保してベンチに座った。

昔のことを覚えていない。とても痛かったこととか、衝撃的だったことだけ、無人島のように記憶に浮いている。残りはただそれ

だけ。何時消えるのかもわからない。

でもそれを悲嘆するのは馬鹿馬鹿しく思えた。

気付かないフリをしていた。

親父を憎んで、心底絶望して、親父に似ていると思った自分を憎んだ。幸せになる資格なんてないと思っていた。夢を見るのも筋違いだと思っていた。

死んでしまえばいいと思っていた。

でも、いくら思い出そうとしても思い出せないじゃないか。

「クソ、馬鹿だな……俺。」

一人で暮らしていくうちに、憎い親父の顔をもう思い出さなくなっただじゃないか。

堰をきったように涙が出た。

そうだ。憎んでいたのは、親父に似ていると思い込んだ、鏡に映る自分の顔だった。

もう俺を縛り付けていたものも、風化しつつあるじゃないか。

鯨張っていた力が抜け、体に染み付いたべたべたの毒が抜けていく気がした。

日付は随分前に変わった。丑三つ時にはだいぶ早いけれど、虫の騒がしい鳴き声は聞こえてこない。

しばらくして、やっと胸を突き上げられるような衝動が引いてきた。

同時に、視線を感じて顔を上げる。

目の前には女の子が一人立っていた。みたところ、一つか二つ年下の世代だった。

第八話

「…なんだよ？」

「別に。こんなところで号泣してる変なのがいるから何かと思って。」

「ざわざわと風に騒いでいた公園の木々が風ぐ。」

「なんの銜いも無く言われたもんだと、目を細めて彼女を見上げた。」

「おまえだつて……」

「風が吹き、木の葉が揺れて白金のビロードが靡いた。うつすらと見えるその大きな目は真っ赤に染まっていた。目元もだいぶ腫れている。」

「…こんな時間に一人で何やってんだよ。」

「それよりも気になることがあった。兎のように赤いその目よりも、その眼の奥にあった色が見慣れたもののように感じた。」

「全部を投げ捨ててもいいと思っている眼。少し前の、鏡を覗いたときの俺の眼と同じ気がした。」

「雰囲気も今にも消えそうな感じた。まさに雲を食んで霞に住んでいるようだな、なんて思う。」

「ねえ、あんたさあ。モムマートでバイトしてたことあるでしょ。死にたそうな顔してレジしてなかった？」

「くるりと体を回して、彼女は俺の横に座った。自分で変なのと称した男の隣に座るなんて、随分と可笑しなやつだと思った。」

「私も死にたくてね。名前も知らないけどさ、むしろちようどいいから一緒に死なない？」

「はあ？」

「ほら、自殺志願のオフ会って本名言わないらしいし。ちようどいいじゃん。」

「笑っているつもりなのか、彼女はくしゃりと顔をゆがめた。とてもそうは見えない泣いている様な顔で。」

俺、変なヤツを呼び寄せるオーラでも纏ってるんか？絡んでくるのは変態と変人ばかりだ。

「うざいな、お前。何がちょうどいい、だよ。俺を勝手に死にたがりにすんな。」

「嘘だ。モムマートの前通る度に死にたそうな顔してたの見たし。わかるんだって。だって私も……」

昔からずっと、死にたいって思ってたんだから。

平均より少し小柄な体を更に小さく縮めて、嘯いた。

「お前喧嘩売ってんのか？俺は死にたくなてねえよ。」

彼女から離れるようにベンチから立ち上がった。「あ……」なんて俺を追いかけるように手を伸ばしかけ、彼女は寂しげにうつむいた。

「人恋しいなら家に帰れ。帰れば家族が居るんだろ？」

「帰れないし。家出しちゃったし。死にたいし。あんな家に……居たくないし。」

「へーそりゃタイヘンダ。じゃあ友達の家にも行けばいいーだろ。」

「家に泊めてくれる様な友達はいないし。」

「じゃあ諦めて帰ればいいだろ。」

「ヤダ。」

「駄々こねてないで帰れよ。」

「無理。」

心底、呆れてため息が出た。

まてよ、なんだよこの状況は。名前も知らない他人と訳のわからない問答なんてオカシイだろ。

なんて頭の後ろの方で言ってる自分がいる。思わず苦笑がもれた。

「お前なんて名前？」

「……熊木 倅音^{くまき せいのね}だけど……何？」

「俺は多田治。名前知って、これで一緒に死ぬにはちょうど悪くなつただろ。」

彼女は、うつ……と唸ってからずるい、と訳のわからない文句を言った。

「ああ、ずるい。」

「ちよつと、認めないでよー。」

彼女は小さく笑った。普通にしていれば、本当に可愛い顔をしていると思った。

「ほら、笑えたならもう死にたくなんて無いだろ？」

彼女はきょとんとして、三秒。そしてまたずるいと言った。

「もう知り合っちゃったから、お前が死ぬと寝覚めが悪い。だから絶対に死ぬな。」

「でも……帰る家無いし。この時間にあんな家に帰ると殺されちゃうし。なら死ぬし。」

家に帰れないから『死ぬ』か。随分敷居が低くなった。もうただの駄駄だ。

「うるせー奴だな。じゃあ……今夜はウチに来るか？」

カンカンと、赤錆びた階段を二つの足音がのぼる。

一体なんでまた、さっき「来るか？」なんて口走ったのか。今となったらそれが自分でも信じられない。別に他意があったわけじゃない。口について出てしまっただけだった。

階段を上りきった狭い踊り場で振り返る。二段ほど下、後ろでは彼女がこつちを見上げて待っている。

強いて言うなら、ほら、同属憐憫みたいなもんか……？

「行く。」と熊木は返事をし、それで困ったのは俺のほうだった。

俺は馬鹿か。

誘った俺の馬鹿さ加減もかなりのものだけど、それにしても見ず知らずの、深夜の公園で号泣する変人についてくる熊木は俺に輪をかけて変態だと思う。

ある意味、無茶と言うか度胸があるのか……？

「なあ、なんでついて来たんだよ。」

「だって、アンタが言ったんじゃない。泊めてくれるって。」

「……だってお前、俺とついさっき会ったばかり。普通はもっ

とさ、警戒したりするもんじゃねえの？……夜に一人暮らしの家に泊まる、とか。」

声が上がらずにうだうだなんて気付いて、無駄に低い、脅すような声になっってしまった。

熊木はまたきょんとしてから、おかしそくに肩を揺らした。

「何笑ってんだよ。」

「いや、だって。……オオカミになるつもりで男って、普通わざわざそんな事言わないでしょ。」

「それは……」

別にそのつもりで呼んだ訳じゃないけど、それにしたってだろうが。月明かりの下じゃなければ顔が赤くなっているかもしれない。くそ、何だ俺は。

「それにさ、別にそういうの、もうどうでもいいし。」

「……ああ、そうかよ。」

鍵を開けて扉を開く。乱暴に靴を脱ぎ捨て、玄関に入った。電気をつけて声をかけると、なんだかんだ言っただけ、恐る恐る熊木は玄関を覗き込んだ。

「うわ、空き巣に入られてるよ！？」

そして、一言。

「ふざけんな。これが普通だ。」

これ以上無いほどの悪態を天然で吐きやがった。

「なんかさ、廃墟に勝手に住んでるみたい。ものすごく暑いし。」

「じゃあ野宿しろ、野宿。」

「あ、嘘、嘘です！立派で快適な邸宅です！」

扉を閉めにかかる俺に必死に抵抗して、熊木は必死に体を玄関に押し込んだ。

「ほら、マチユピチュ遺跡みたいな感じだし。」

「あれ雨ざらしじゃねーか。」

ひとしきり熊木は失礼なことを言い倒し、けたけたと笑った。唐突にへこんだり、そうかと思えば突然悪ふざけを口にしたり、感情の

出目が賽のように慌しい。

とりあえず、居間の方へと案内して予備のタオルケットを準備した。
「このソファ―使っていい。空調は無いから扇風機で我慢しろな。」

勝手に風呂入っていいし……冷蔵庫のものは適当に食っていいから。

「

熊木は渡したタオルケットを取り落とし、あわあわとそれを手繰り寄せた。

「う、うん。」

いつものようにシャワーを浴びて着替える。とりあえず予備のタオルも風呂場のほうに用意しておいた。

そして隣の部屋へ引っ込もうとする俺を、奇妙なものでも見る目つきで見上げた。

「なんだ？」

「なんか手慣れてるから……いつもこんなことしてるのかと思つて。」

「別に。ただ、俺の知り合いにはお前みたいな変人が多いんだよ。」

熊木は渡したタオルケットで、護るように全身をくまなく覆い、丸まった。

「……本当に、何もしないんだ。」

「そういうのに絡まれんの、めんどくせえんだよ。」

たしん、とまさに拒絶を表したような襖のしまる乾いた音が響いた。

それにタオルケットを取り落とすくらい震えてたじゃねえか。

ベッドに腰を下ろした。

空気が重い。水浴びしたばかりだつてのに全身に汗が浮いてきて、

陸に打ち上げられた魚のような気分になる夜だった。開け放った窓

から、二軒となりの家の風鈴の音色が幽かに聞こえてくる。

一機しかない扇風機を譲った上に、居間との襖まで締め切っているから尚更だった。寝室の小窓はすぐ隣のアパートの壁のせいであま

り風を送ってくれない。

「ねえ、まだ起きてる？」

しばらくして、襖越しに簞つた声が聞こえてきた。少しの間返事を

するかどうか逡巡し、返事をした。

「ありがとね。」

「別に何も。」

「私の家さ、早くにパパが死んじゃって、小さい頃から母子家庭で……ママには迷惑ばっかかけてて。」

「……それで？」

「それで、私、早く仕事を始めて、ママにさせてあげようってばっかり考えてた。小さい頃から、お金を稼がなきゃ、早く仕事をしなきゃって。まあ、儲かってもママが悲しむような仕事はするつもりないけど。」

静かな声だった。部屋の静寂が、言葉の余韻で余計に滲み込んでくる様な。

「高校に入ってすぐの頃に、入院するような怪我をしちゃってね。それでその時お世話になった看護婦さんたち……看護師さんか、今はそれに憧れて。それでさ、なりたいと思うようになったの。」

夢があるなら、捨て鉢になっちゃ駄目だろうに。

俺は黙って、続きを待った。

「退院してそれからしばらくした頃に、ママが再婚したの。それも、公務員のお堅いバツイチオジサンと。そいつには私の二つ上の女の子の連れがいたの。私と違って、もうお嬢様みたいに上品で、品行方正の。……私なんかバイトバイトだったから、部活とか出来なくてさ。そういうところとかが向こうはイヤみたいで、なんだか仲良く出来なくなつて。」

えへへへ、と言葉を誤魔化すように熊木は笑った。それから、熊木って苗字は前の苗字なんだけど。って前置きを。

「なんかさあ、ママのためについて今までお金だ、バイトだって思いつめてきたものを全部、オジサンが持って行っちゃって。一番強く繋がってると思ってたママとさえ、なんか距離できちゃったみたいで。」

すんすんと、鼻をすすするような音が聞こえた。

「……まだ起きてる？」

「ああ、ちゃんと聞いている。最後まで聞いてやるから、全部吐き出しちまえよ。」

俺には熊木が思い悩むことを軽々しく、とやかく言うことなんて出来ない。

それでも後腐れのない一晩かぎりの独白の相手には、なつてやれるだろうと思った。

「うん……。それで、ママは少しずつ私に、お姉ちゃんのようにしつかりしなさいって言うようになった。きつと、頭の固いオジサンに私が嫌われて、私を育てたママまでオジサンに嫌われちゃうのが怖くて。私は何をしても、私じゃなくてオジサンと、オジサンの娘ばかりを見るようになった。」

熊木の声が、湿っぽい。それでも、襖越しの声はお互いの距離関係にちょうどいい優しさだった。泣き声交じりに熊木は続けた。

「私は看護師になりたいってママに言ったんだけど……そしたら、お父さんがお金を出してくれるからちゃんとしたいい大学に行きなさいって。……だからさあ、私必死にバイトして少しでもたくさんお金ためて、それ以外だと一生懸命看護学校に入れるように勉強して、今までやってきたの。」

少し、というかかなり驚いた。

初めて眼を合わせたときに、まるで自分の目を見つめているようだななんて思ったけれど……状況こそ違うが熊木は俺に良く似ていた。

「今日、ママが本気で怒ってね。大喧嘩して……産まなきゃ良かったって言われちゃって……。もう私を助けてくれる最後の気持ちの糸が切れちゃった気がして。歩き回ってあの公園で泣きそうになったら、後からふらつと来たあんたがびっくりするくらい号泣してさあ。……それも私が泣くのを忘れるくらい勢いで。」

泣きそうになったら、か。

見上げた天井は暗く、いつもの様に染みが踊っていた。

「だから、声かけなくなっちゃって。あんたのこと見たことあつて覚えてたし、全部どうでもいいやつてなった私と一緒に死んでくれるかなあつて。」

「そんな……」

馬鹿なこと、とは言えない。ほんの数ヶ月前の俺が今夜のような誘いを受けたなら、きっとそれもいいかつて思っていたかもしれない俺だって少し思い立って、橋の手すりの向こう側に立ったなら、きっと飛んでいたんじゃないのか。

「……それしかないのかよ。夢を見て生きるよりも、ただ死ぬ方が良いのか？」

今度は熊木がしばらく黙り込む番だった。

「いままで必死に勉強した分も、必死にバイトして貯めた金も、それはお前が自分のために頑張ったものだろ。それも全部信じられないうつていいのかよ……。それだけ頑張れる看護師の夢自体、そんなに簡単に諦められるものなのか？」

はああ、なんて長い深呼吸が聞こえた。

「だからさ、あんたが私と死んでいいって言うてくれたら……。そうじゃなくてもあんたがこの部屋で私を滅茶苦茶に汚してくれたら、一人でも死ねるんじゃないかって思ったのに。ずるいね、私……。」「しばらく、熊木はしめしめと泣いた。どれくらいの間だったのかわからない。噁り上げる声も聞こえなくなった頃、声をかけた。

「これからどうするんだ？」

返事はない。眠ってしまったかもしれない、と思ったけれど……。

「もしこれからバイト増やして、一人暮らしのアパート探すんなら……しばらくこの部屋半分貸しても……いい。」

雄一のいつかの言葉か、裕子さんの言葉か、祖父に言葉を貰ったからか。

理由はつけようと思えばいくらでもあるし、無いといえは無い。あえて言うなら、ふと、熊木が俺と似ていると思ってしまったから。あの一人暮らしのときに、祖父母が手を差し伸べてくれたようにし

てやりたいと思ったからか。

「俺にも……バイトでアパート借りて苦労したっていう馬鹿な知り合いが…居るからさ。」

泣きつかれて眠ってしまったのかもしれない。やはり返事は無かった。

静かな部屋の空気に打ちのめされて、また随分突飛なことを言っちゃまったもんだと反省して体を横たえる。寝苦しかったけれど、横になったとたんに緊張の糸が切れたらしい。すぐに睡魔が襲い掛かってきて、負けた。

第九話

朝になって、わいわいとやたら騒がしいのに気付いた。時計を見たら九時過ぎ。五時間くらいは寝たのか。

重たい体を起こして、襖を開く。

「おはよー治。」

「おはよー。」

あつけにとられたというか、なぜそういう可能性を考えなかったのか自分の浅慮さ加減に呆れた。

うるさかったのは、熊木と裕子さんが楽しげにおしゃべりをしていたからで。二人して楽しそうに寝ぼけた俺に手を振り上げた。

「治も隅に置けないねー、こんな可愛い子を部屋に連れ込んだじゃってー。」

ぷふふ、なんて口元に手を当てて笑ってる裕子さん。

「何を勘ぐってるんだか知りませんが、そういうんじゃないですか。」

「照れちゃって…んまー。」

やたら声高に俺のことを煽ってくる。こっちは現状をどうするかで頭ン中がぐっちゃぐちゃだったのに。

「昨日のあの言葉は嘘ってこと？」

熊木はきょとんとこっちを見上げた。だからそんな眼をするんじゃないって。

「何？どんなことになってたのー？」

「一緒に住もうって。」

「っんなこと言ってるねえ！」

キヤーなんて歓声をあげる裕子さんを押しつけた。

「もしならこのアパートの半分貸すって言っただけだろが！ーそもそもあれお前寝てたんじゃないのかよ！？」

押しのけられたままの裕子さんの歓声がさらに半オクターブ上がる。

「あ。」

手足をばたつかせ大歓声の裕子さんを見て遅ればせながら気付いた。今の俺の言葉、最悪に逆効果だ。……眩暈がしそうになった。

「……出掛けてくつから。」

これ以上問答して必要以上に自分を追い込むことはない無理に納得。逃げるようだと思ったけれど、実際に逃げの一手なんだから仕方ない。

「治？ 昼間からどこ行くの？ たしか今夜もバイト休みでしょ？」

「ハローワーク。」

「あ、何なに？ 治つてば就職するの？」

これまた興味津々といった具合に裕子さんは身を乗り出した。

「まあ、いい加減そろそろ。」

言われて決意するなんて随分簡単で、情けないと思ったけれど。でもいつまでも安っぽい意地を張り続けて馬鹿を見続ける方がよっぽどアホらしい。

キツカケはなんにしても、決めたのは俺自身だし。

「ふふふふ、キツカケはさっちゃんって訳ね？」

「え…そうなの？」

なんだか訳のわからんことに照れたような顔をする熊本。それに、あの一件以来少し意地が悪くなった気がする、悦に入った裕子さん。違う。全然断じて違うから。」

「違う…の。」

なんだか熊本はがっかり肩を落とした。

「いや、普通違うだろ。何がっかりしてんだよおまえ。」

「まあまあさっちゃん、何かと可愛い治の話をしてあげるから機嫌直してー。」

「は、はい。」

「はい、じゃねー！ 裕子さんも変なこと言つのやめてくださいよ！ マジで怒りますからね。」

鞆を引手繰る様に取り、肩にかける。女三人寄ればかしまし

て、二人だつて十二分だつて。

「畜生お……じゃあ行つてきますから、裕子さんは適当にすばやく帰ってください。」

「あれえ、さっちゃんはいいんだー？」

もう聞こえなかったフリで玄関から駆け出した。これで雄一が来たらどういつ騒ぎになることか。

頭痛がするほど頭が重く感じた。

第十話

しつこかった残暑もやっと落ち着いて、秋を越え冬になった頃。

予想通り雄一がはじめて来た時には熊木を見て号泣した。額面どおりホントに号泣した。

「お前はそんなやつじゃないと思っていた。」って今まで生きてきて聞いたことも無いほどの恨めしい声で。状況を説明するのに尋常じゃないほど骨を折った。

熊木はというと、昼間は高校に通い夜は十時までアルバイトの日々、帰ってきたら遅くまで勉強。俺はというと深夜バイトで、昼間はローワークにいつては面接や試験。

休日は昼間か夜に顔を合わせて話をしたけれど、完全に生活のリズムはずれていた。

休日になれば例によってあがりこんでくる裕子さんや雄一と、熊木でなんとか遊びに行った。

映画に行けば、シリアスなシーンでなぜかツボに入って笑ったり、少し泣かせる映画だと周囲に迷惑がかかるほど大泣きする。これには俺も、雄一も、裕子さんでさえ困った。

結局映画は家での鑑賞会がメインになるくらいだった。

カラオケに行ったら、熊木は驚くほど音痴だった。

俺も人のことをいえるほど巧いのかと言われればどうかかわからないけど、これは困った。

なんせ、いままで雄一にしても裕子さんにしても異常なほど巧い部類だったから、そんな時になんて声をかければいいかわからない。

熊木は俺の隣に座ってうれしそうに歌って小さく踊って、ノリノリだった。雄一も裕子さんもノリノリだった。俺だけ耳もしくは脳がイカレてるのかと思うほど。

「どうかな治ちゃん。」

熊木は覗き込むようにこつちをみてきて。その向こうでこれ以上無

いほどにこやかに、かつ眼の奥にギラリと光をともした裕子さんが見えて。

「まあ、……結構いいと思うぞ。この曲はかなり好きなんだ。」

「ありがと治ちゃん。」

熊木はへにやりと笑って首を倒して見せた。

こっちはとうとうぐつしより冷や汗をかいていた。

なるほど、こういう時って裕子さんや雄一みたいな素で巧いやつには「上手だ」って言って、そうじゃなければ「いい歌だ」とか「この曲が好きだ」って言えば相手が傷つかないのか……？

まあとにかく、なんだかんだで熊木はうちに住み着いた。雄一とも裕子さんともうまくやれているようで、それは本当に良かった。

それからまたしばらくして、何本も面接したりなんなりして、最終的に引つ掛かったのは中堅どころの警備会社だった。

正式な入社としては時期がおかしかったが、欠員が出たための警備士募集だったとか。

身辺調査の結果、忌々しくはあったものの親父が警察官であること、それとお袋が元婦警であり、今は交番相談員をしているのが決め手になったようだ。

祖父もちょうどこの頃に退院して、自宅で療養しているらしい。改めて報告と挨拶にいかなきゃだと思う。安心させておかなきゃ駄目だ。

深夜に、営業を終えた会社や学校などを巡回したり、二十四時間体制で市役所のような場所を常駐で警備したりする仕事だった。

越野家の店長は、貴重な戦力が減ってしまったとやたら俺を持ち上げて辞めさせまいとした。

まあ無論、決まったのでやっぱり辞めますといったら残念そうだったものの、しかし祝福してくれた。

話を聞いたら、この越野家も就職が決まった『太陽総合警備保障株式会社』の警備物件だったらしい。

そういえば深夜に頬に傷持つ系のホンシヨクが来て、越野家で暴れまわったときに警察と一緒に来たのは太陽警備の警備士だった。

支給された制服をみて思い出したが、早朝によく弁当を買いに来ていた人もいたし。

警備会社、それもソーケーとか、アルソックと違って中堅どころだから尚更なのか、配属された巡回機動隊には一匹狼のような人間が多かった。

軒並み年上で、しかも一番歳が近くて六歳以上という今まで付き合いことが無かった世代だった。

仕事的には夜、深夜、早朝の巡回をこなし、その合間に契約物件のセンサーが何か異状を察知したら中央管制を経由して連絡が来る。それを確認するといった仕事だった。

全身を紺一色の制服と紺の帽子で包み込み、警棒を腰にさし、毎晩人のいなくなった建物をみて回る。

正直、一匹狼が増えるのもわかる気がする。言ってしまうえば基本はすべて自分でやらなきゃならない個人プレーだ。

向こうもこっちにどう絡めばいいのか図りかねているようで、それにこっちから話しかけるにもなんだかきつかけをつかみにくかった。仕事については問題なく教えてもらえる上に、いざ巡回を開始すればすべて一人でやる仕事だ。なにかが噛み合わない様な感があったものの、しばらくしたら仕事にはだいぶなれた。

暖冬だったため、あまり霧が出ないで学校などに設置された外周部の赤外線も誤報を出しにくいし（ルパンとかがやるように、霧や煙の中でも赤いラインは見えなかった）雪が積もって巡回に使う車が往生することも無い、いい年だと隊長はしきりに言っていた。身長が百九十にもなる和入道のような人、それが隊長だった。

しばらくたった、年末が差し迫った頃、深夜巡回中に携帯がなった。家の電話からで、出てみると震えきった泣き声の熊木だった。

「どうした!？」

たつぷり時間をかけて、震えた泣き声で途切れ途切れに返事が来た。
「外の階段を誰かが上ってきてドンドン扉を叩いて……鍵をかけて
たけどノブをガチャガチャして……怖くて……」

「少し……待ってろ。」

年末年始には中央管制から警報が出たら気を引き締める。本物の泥
棒とかが良く出るからな。

そう隊長が言っていたのを思い出し、とにかく、巡回も放り出して
すぐに会社の車を飛ばした。

電話から五分ほどで家に着いた。すべての部屋のカーテンの隙間か
ら光が漏れている。テレビの音が下まで聞こえてくるほどの音量に
しているようだった。

すぐに周りをみて回って、誰も居ないことを確認した。特に壊され
ていた場所はないし、変質者らしき人影も見えなかった。

隣近所や一階の住人に、今まで挨拶くらいしかしたこと無いのに話
を聞いた。どうやら近所の住人たちは気付いていなかったらしい。

「凄い大音量でテレビを見ているからどうしたのかしらと思ってい
たけれど、それならしょうがないわねえ。」

隣の愚痴っぽいおばさんも最後に、気をつけなくっちゃね。なんか
あったなら頼ってくれていいわよ。なんて言ってくれた。

階段を上がって鍵を開けた。ドアノブを引くとチェーンがかかって
いた。

「熊本大丈夫か？」

「お、おざむちゃん」

バシャーンなんてすさまじい音をさせて襖を開け放ち、熊本は俺の
布団に包まった状態で芋虫みたいに出てきた。

ボロボロに泣いてるのに、なんだか緊張感がまったく無い。

「とりあえずチェーンはずしてくれ。」

「う、うんー。」

布団に包まった芋虫のまま玄関をズリズリ這って来る。

……ああ、俺の布団が砂だらけだろ……。

あまりの緊張感の無さにそんな自己中な考えまで一瞬脳裏によぎった。チエーンをはずして抱きついて来た熊木の震えに気付くまでは改めて抱きつかれて気付いた。

熊木は小柄な女の子だった。

初めて会ったときから、おかしなやつだと思っていたし……死にたいだの死ぬだの口に出してはいても、どこか失礼なやつで、そのくせ芯が強いやつだと思っていた。

熊木はすさまじい勢いで泣きながら、凍えきったように体を震わせていた。わんわんと泣きながらも口元がだらしなく緩んで見えるのは、多分安堵からだろう。

「……もう大丈夫だ。」

今まで思っていたよりあまりにも頼りない熊木が、その体が、このまま放って置いたら砕けてしまいそうな気がした。壊れ物を扱うようにそつと抱き、頭をぽんぽんと撫でてしばらくの間大丈夫だ、と繰り返し言い聞かせた。

どれくらいの間かわからない。五分か、十分か。それよりずっとなのかもしれないけれど、やっと熊木の震えが落ち着いてきたとき、制服の胸ポケットの中で機動隊員連絡用の携帯がけたたましく鳴った。携帯を開くと、中央管制からだった。

巡回で物件に入るたびに警備の解除信号とセット信号を入れる。それによってどこににいるのかを中央管制は把握するらしい。その信号が途絶えたせいで、連絡を入れてきたんだろう。

どうしたものかと視線を泳がせ、そしてそれを下ろした。

熊木は代わらず俺の胸をビショビショにしたまま、顔をうずめている。

ピリリリ、なんて携帯のコール音がこれ以上無いほどやかましい。逡巡していると、きつちり俺の背中に回されている腕が、少しだけ強く胸を締め付けた。

「わかったって。」

携帯に出る。運よく、というか、こういう話が一番通じそうな隊長

からだった。

「いまだどこにいるんだ？何か問題でもあったか？」

顔つき体つきは和入道なのに、少し甲高い独特な声。安田大サーカスの黒ちゃんほどじゃないけど、隊長も凄いギャップだ。

言葉を選んで、問題がなさそうな言い回しに変えて、「家の近辺に変態が出たらしくて、家に待たせていた連れが怖い目にあつたらしくて、巡回中なんですけど一度家に来ています。」といった内容を伝えた。

すると隊長は「じゃあ待機室空けるように言うから、今晚は一緒に来れば良い。栗橋には車両待機を頼んでおくよ。」といってくれた。夜、深夜、早朝の巡回の合間数時間、仮眠を取るための待機室を空けてくれるらしい。

「ありがとうございます。準備が出来次第連れをそっちに届けて、また巡回を続行します。」

「気にしなくていいぞ。明日朝にでも栗橋に一言言っとけば大丈夫だから。」

「はい。」

もう一度お礼を言つて携帯をきつた。

それから準備をするにも着替えるにも電気一つ消すのにすら近くにいないと怖いとかでさんざん手間取ってから、やっと車に乗った。車のライトが届かない道端の闇の中に、こつちをみている人間がいる気がして怖いと、熊木はまた体を縮込ませた。

「大丈夫だつて。」

頼りなくシートベルトを握り締める手を、そつと握った。ひやりと冷たく感じた。

「治ちゃん、手暖かいね。少し硬いけど、なんか落ち着くし。」

「よく世間で言うみたいにな、心が冷たいからな。」

「嘘だよそれ。手が暖かい人は心が暖かいんだよ、きっと。」

「へえ、熊木は手も心も冷たいやつなんだな。」

「……やっぱり手が暖かい人って心冷たいんだね。」

ふふふ、なんて熊本はやつと小さく笑った。

「知るか。」

「ちよつとそれずるいし。」

十分ほどそんなやり取りをしながら車を走らせると所属している太陽警備支社についた。車から見上げて、熊本は「ぼろい建物だね。」といつか俺んちに來たときみたいな文句をたれた。

「やかましい。四十年くらい使った建物だから、もう少ししたら引っ越すんだとさ。あとそういうのすぐに口に出すのやめろ。」

「へえー。」

タクシーの会社みたいに設置されている、巡回車専用駐車場に車を止める。手を引いて待機室まで連れて行った。

「なにも無ければ一時間しないで巡回終わるから、テレビ見てもいいし、寝てもいいからな。なんかあつたら携帯に電話しろな。」

こくこくと頷く熊木を確認してから、管制室へ移動した。

隊長は「嫁は大丈夫だったのか？」なんて心配したような、でもどこか皮肉っぽい顔をした。

「嫁じゃないです。」

念を押して、あとはおおむね大丈夫だという話をしたら、隊長は待機室に嫁を覗きに行こうか、なんていいだした。

「隊長、今あいつびびっちゃって敏感になってるんで……隊長がいくと怖がって大泣きすると思います。やめといてやってください。」

隊長は目をむいて、今まで見たことない顔で俺を凝視してきた。

しまった、地で妙なと言っちまった。隊長は良くしてくれただつてのに、こんなときにひねくれたことを……。

「すいま……うわはははははははは」

謝ろうとしたら、こっちの謝罪を遮って歪な鐘を叩きまわしたみたいな声音で隊長は大笑いしだした。

今度は訳のわからなさにあっけにとられていると、隊長はひいひい言って呼吸を整えてから座っていた椅子から身乗り出す。

「いやいや、どうにも最近の若いのはとっつきにくいものだと思う」

てたが……なかなか言うじやないか。」

「すいません。失礼なことを……」

「違う違う。それくらい言えたほうがココじゃ上手くやってけるって話した。如才の無い若者なんてつまらないのさ。それが地か？」

「……まあ、はい、たぶん。」

また豪放に隊長は笑った。

「いい性格してるじゃないか。俺は好きだぞそういうの。」

「はあ、……ありがとうございます。」

「んゝまたか？」

「あー……デートの待ち合わせは明日の朝で良いんですか？」

もう何がおかしいのかわからなくなってきたけど、隊長はおかしそうに笑っていた。

「堅苦しいのは締めるべきときと上司にだけで充分だ。支社長とか、常務とか、所長とか。そういうキャラは今までいなかったから貴重なんだ。」

栗橋なんか自称Mだから喜ぶぞ？なんて付け足した。

「しばらく栗橋さんには猫を被らせて頂きます。」

そんなやりとりをしてから、会釈をして改めて御礼を言った。

「安心して張り切って行つて来い。」

笑う隊長に任せ、車に乗って途中から巡回を再開した。

巡回が終了して、待機室に戻るとテレビも蛍光灯もつけたままで熊木は眠っていた。

音を立てないように警棒などをはずし、テレビを消してもう一つの布団にもぐりこんだ。

蛍光灯はそのままにしておいた。

明るくて眠気が来ないどころか、そういえば襖一枚さえ間に挟まずに同じ部屋で寝るのはこれで初めてだったせいで……熊木の安定した寝息が、気になって目が冴えるばかりだった。

第十一話

それからしばらく、巡回中の空き時間には家に帰って夕飯を食ったり、ちよいと顔出すくらいの寄り道を頻繁にするようになった。

あれ以来変質者らしき人間と言うのが来た形跡は無いらしい。念のためにアパートの入り口に、貰った太陽警備のステッカーを猛獣注意みたいに貼っておいたのと、俺が結局制服で頻繁に寄るもんだから、本当に警備してるとでも思ったんだろうか。

仕事では、これはちょうどいいと熊木のことでいじられるようになった。そんなこんなでいろんな話に参加するようになった。

仕事で、今までであった違和感。奥歯に何かが挟まったみたいなお噛み合わない感じは無くなった。とはいうものの、熊木に関してとやかく言うのはやめて欲しかった。

なんつーか、こう。

まあいいか。

警備の仕事はつまり普通の会社が休みの日にこそ忙しくなる仕事だ。そりゃ当然で、会社員がいる時間帯よりも無防備な夜や休日こそ泥棒が入るんだから。

だから、今年は年末からほぼ缶詰のような状態で年を越していた。頻繁に帰ってはいいたけど、熊木が一人だろうって裕子さんや雄一が来てくれていたのには本当に助かった。

まあ、多分宴会とか、つまり酒飲みの口実が欲しかったんだろうとは思っけど。

一月も半分が過ぎてやっと纏まった仕事がもらえた。とりあえず、巡回中にサボって近場の小さい神社に一人で初詣には行ったものの、一度は祖父に挨拶に行かなきゃ駄目だろうと思った。

前もって連絡を入れると、祖母が出て、「いらっしやい、いらっしやい、お母さんたちも呼んでおくわ。」と例によって甲高い声で歌うようにいった。

それで、さあ行こうと準備をすると、熊木がやたらとついて来たが
った。

えへへへと笑っていたが、それがどういう意味なのかわかっている
とは思えなかった。

とりあえずいろいろと説明して無理だといったものの、あれやこれ
やと問答をした結果結局車から降りないという条件でついてくるこ
とになった。

なんせ、泣き真似まがいの演技まで使ってきたから、まんまと騙さ
れて折れた形だった。

制服を着て、上にコートを羽織る。警備の腕章と胸の紋章が見えな
くなるせいで、工場の作業員のつなぎのように見えた。

三十分ほど車を走らせて、祖父母の家にたどり着いた。降り際に「
本当にたのむから。」と熊木に念を押して、家に上がった。

祖父は会社の経営を智恵理叔母さんに任せたらしく、コタツに足を
突っ込んだまま横になっていた。二つ隣の部屋から伸びた長い長い
チューブが、やはり鼻から肺に入っていた。

だいぶ遅れた新年の挨拶を済ませ、就職報告をしてコートを脱いだ。
祖父は体を起こして目を細めてた。そして、「安心した」と少し泣
いた。祖父は涙もろくなったと思う。

仕事はどんな具合なのかなど少し話をしてから、連れを待たせてい
るからと腰を浮かせたとき、お袋と妹が来た。なぜか一緒に熊木が
いる。

「久しぶりね治。」

お袋は少しだけ痩せたようだった。静かに俺の制服姿を見て微笑ん
だ。

「車に彼女待たせっぱなしってどうかと思う。」

有理はというと、なんとも言えない意地の悪い笑みをこぼしながら、
俺と熊木を交互に見つめている。

「これは、しょうがないよね？」

熊木はまるで自分の白が八割の陣地を占めていて、さらに四隅も押

さえたオセロでも前にしたみたいな顔。

ああ、こんな気がした。だから無理だつて言っただ。

「ご挨拶が遅くなりました。治ちゃんの家でお世話になっている熊本倅音です。あけましておめでとうございます。宜しく願いします。」

しゃなりと座つて、三つ指なんかついて熊本はぺこりと礼なんかしてやがる。

「まあまあまあ。」

「治。」

ぽんと手を合わせて声を上げる祖母を遮り、静かに祖父が名を呼んだ。

「トヨジい、……なんだい？」

でも、ゆっくりと振り向くことしか出来なかった。その静かな声はあの時のような……いや寧ろ退院してるぶん、あの時よりも激しい暴風をソフトボールに無理矢理詰め込んだような圧力の声だった。つい今しがた、安心したと涙を流していた祖父はこれでもかど無表情な、でも最近やっと感情を見て取れるようになった俺の目からしてもっとも厳しく見える無表情でもって、背筋を伸ばした。

それで、一時間ばかり説教された。

結局それで開放されたらどこへ行くでもなく家へ帰った。熊本はなにか上機嫌だったけど、こっちは気をもんで神経をすり減らすばかりだった。

第十二話

春。

熊木が念願の看護学校に受かった。何かと問題は多かったらしいものの、どうしたのかとたずねると「何とかなつたし、まあいいですよ。」としか言わない。

ふと、俺は熊木のことを何も知らないじゃないかと思った。

知っているのは、熊木が家出をするに至った経緯だけだ。ふと、ついこの間祖父に詰問されて困つたのを思い出した。

そんな俺の顔を見て、熊木は苦笑した。

入学金で二十万円ほど。年間で百万円弱だなんて言っていた。わかつていたけど今まで貯めたお金の大部分を持っていかれちゃった、と。

でも、すぐに嬉しさに綺麗に破顔しなおす。

「治ちゃんにお世話にならなかつたら、五年くらいお金貯めなきゃだつたよ。ホントにありがとね。」

「別に。」

昔から素直に感謝とかされるのがいまいちむず痒くて苦手だ。

適当に切り返したら、なんだかわかつたようにくつくつと熊木は笑つた。

「何笑つてんだよ。」

「べつつにい。」

…… 苦手な空気だ。

貯金をほとんど使っちゃつた……って。頼られたってこと、か。

…… 別に、嫌ではないけど。

まあ、熊木から話さないなら、わざわざ根掘り葉掘り聞かなくてもいいか、なんて思った。

看護学校の教科書は異常に多かった。横幅三十センチ、奥行き二十

センチの三段本棚がほぼ埋まるくらいの量だ。一年目、二年目には学制的なものをぎっしりとこなして、三年目は実技的なものを習得するらしい。教科書を買いついていき、それを運ぶ役になった俺は、舐めていた分その量にずいぶんと驚かされた。

勉強の内容も複雑だったらしいけれど、話を聞く限り学校は楽しそうだったし、なにより生き生きと目を輝かす熊木を見ているだけで安心できた。

このころから、有理までうちに上がりこんでくるようになった。このときになってやっと知ったことだけど、有理も看護師になりたいらしい。

今の彼氏が今年から自衛隊に入隊した俺の一つ年下で、そのお袋さんが看護師として働いているらしい。

結婚を考えているとかいい、向こうの家にも何度もお世話になったとか。親父がお袋に当たるのをみて、自分はそれを口実に彼の実家に転がり込んでいるってだけみたいだけれど。

有理の彼氏、谷口^{たにくち}宏道^{ひろみち}のお袋さんと親父さんは有理のことを気に入ったらしくて、よくしてくれるとか、どうとか。

今のうちから、看護学校に受かりさえすれば、谷口のお袋さんの病院の援助で学費を免除してくれるとか何とか、そんな話をしているらしい。

それでこの前の、正月の一件以来メールのやり取りなどをし始めたらしい熊木と有理は、いつの間にか仲良くなっていた。

熊木が看護学校に入学したのをキッカに暇さえあれば看護学校の話や何かでうちに上がりこんでくる。

熊木は熊木で、口が軽い有理からいろいろなことを聞いたらしくて……ずいぶん、有理の頭と口の軽さには嫌気がさした。

熊木経由で実家の惨状が俺の耳に入ってくるのが、たまらなく耐え難かった。

卒業から二度目の夏になった。

初めはハードな看護学校のスケジュールについていくのがやつとだった熊木にも余裕が出来てきたらしい。バイトも安定して組んでいくようにうたがひ。

休みがあったときなんか、何度か、みんなで車を飛ばして海やデイズニーランドなんか遊びに行った。

この頃になると、雄一はあまりあがりこんでこなくなった。

二年間の養成学校の卒業公演に向けての訓練だとかでいろいろなところを駆けずり回っていた。プロダクションの面接や試験も何度も受けに行っていたらしい。

養成学校の講師の一人、名前は忘れたけど火曜サスペンスみたいな番組の中堅俳優に酷く気に入られたらしくて、それに順当に実力をつけることが出来ているらしくて、本当にたまに顔を合わせると随分と印象がコロコロとかわった。

俺の知っている雄一は変態で変人だった。

それが、その方向性に自信を持った変態な変人にドンドン進化していきやがる。

応援したいのは山々なもの、どうにも、違和感が強くなるようだった。

嫉妬というにはあつさりしている。なんとも説明のつけがたい、凡庸な俺と離れていく雄一の違いへの焦燥だった。

一年目の夏と違って比較的涼しい夏だった。

熊木は俺以上に暑さに強い性質で、別段扇風機があれば充分だというやつだったし、俺もあえて今年は空調を買わなくてもいいかと、団扇片手に過ごした夏の終わり。

いよいよ具体的に有理の進路の話が固まってきたらしい。

俺の中じゃ、昔から勉強とかないがしろで、いつも十段階で四とか三をとっていた記憶しかない。そんな有理が果たして現役で看護学校に受かることが出来るのか、はなはだ疑問だった。

しかも、この夏の時期になると行軍があるとか、どこかの駐屯所に

行くとかで谷口が遊んでくれないと、しょっちゅう喧嘩をしているようだった。

有理自体、酒飲みにはやはり苦手意識があるらしくて、自衛隊の先輩にしょっちゅう連れ出されてベロベロに酔って帰る谷口に不信感を募らせることも多かったらしい。

うちに来るたびに、愚痴ばかりをこぼしていた。

高校でも続けていた柔道部の関係者で、整体方向の資格を持つおじさんがいたらしく、有理はそっちの派生方向から看護師の資格取得の誘いを受けていたらしい。

けれど、谷口のお袋さんのほうの誘いを断ると谷口との関係にあまりよくないんじゃないかと、蹴ったんだと俺に笑いながら言った。単純にどうしたいとか、どっちが楽しそうだとか、楽しそうだとか、そんな基準で自分の身の振り方を考えるところはまったく変わっていない。

やはり、そういう甘さが、どうしても好きになれなかった。

熊木はなんだかそういう俺の様子をどこかで察していたのか、俺の有理の間に入っているように思えた。

事実、有理の愚痴は、大半を熊木が聞いて、その中で近況はどうだとかいう情報を間接的に俺に話していた節がある。悪いことをしたと、いつも思っていた。

俺は、それこそドライに有理の現状を見ていた。

たとえば俺が、そういう時はどうした方がいいだろうと口出しをすると。

「うるせーよ。自分の好き放題やってきてる兄貴にとやかく言われたくないって。」

そう、返事をして一切耳を貸さないやつだったから、尚更だ。

この頃は、たまに無理矢理引っ張ってこられた谷口と、我が家で夕飯を食べたりした。

積極的にセッティングしたのは熊木で、単に料理することが好きな俺に腕を震わせるためだとか言って。

いくらなんでも、完全に無視をするわけにもいかないから、なんだか娘の彼を迎え入れるようななんとも居心地の悪い食卓の場を提供する羽目に、何度もなった。

自衛隊員として、五厘刈りの薄ら青い坊主頭。右耳は熱で変形している。もともと有理とも柔道部で知り合ったらしいから、寝技のときに激しく畳に擦り付けたんだろう。

変形こそしなかったけど、俺にも経験はある。治療に耳の軟骨に直接注射をうつのはずが痛かった。

目は切れ長の釣り目で本当に細い。頬骨が出張った顔立ち。格闘家として厳しい鍛錬をして、顔をシャープにした雄一のようにも見える。

悪く言えば、それほど器量良しではなくて、やや人相は悪い。ディフェンスが苦手なボクサーが試合後に顔を腫れさせたような感じだ。

こつちからいろいろときこちなく話しかけるものの、なんだか人見知りをするように曖昧な返事ばかりが返ってきた。

間接的とはいえ、あまりよくない話ばかり耳に入るせいで、どうにも印象は悪い。話は進まない。

「谷口君、なんだか治ちゃんのこと怖がってたよ。観察されて緊張したんじゃない？」

解散した後、熊木は笑った。少し責めるような声だった。

「治ちゃんってば、ガンコオヤチって感じだったし。」

「俺は人見知りするんだよ。それに、有理の愚痴ばっか聞いてるからどうにも。」

「初対面で家に私を呼んだのに？」

「……変人は別なんだよ。」

「酷いねー。私も有理ちゃんに愚痴っちゃおうかな。」

熊木は逃げるように居間に。そしてぱたとせわしく食器を持つてくる。台所で洗い物をするのは料理を作った俺の役目だった。

「好きにすればいいだろ。」

思った以上に投げ捨てるような声が出た。熊木は「まったく。」なんて口を尖らせて俺の肩を叩いた。

「たとえば洗濯物を洗濯籠に入れないとか、本を読んでも私が話しかけても気付かないとかさ、折角つくったピーマンの肉詰めのパイマン残すとか、そういう愚痴って女の子は誰でもいうよ。」

「どさくさでそういう事言うか。へえ、そうかい。」

「怒らないでよ。だーからさ、有理ちゃんの愚痴って、聞いているこっちがアチチチチってなるし。もう少し谷口君と有理ちゃんのこと、優しく見てあげたら？」

「別に厳しく見てるつもりは無いけど。」

「けど、優しくも見てあげられない？」

熊木は困ったように、柳眉をゆがめた。

「お前が気を使う問題じゃないよ。」

「そういうわけにも、いかないでしょ。」

いつからか、熊木は俺の先回りをするようになった気がする。

自分でも、わかってるはずだった。でも、いつだって俺は一つずつ納得して落ち着けないと、折り合いをつけられない性分なんだろうと思う。

おざなりと、広く浅く上手いことやっていこうとお気楽な有理のこととは、今ひとつ心情的に許せない部分があるのは、昔からだ。

「有理ちゃんもさ、一生懸命やってるよ？勉強はもちろん、この間なんか体力測定で女子の部、学年総一位だったんだって。」

「へえ。」

傍らで沸かしていた薬缶の湯が沸騰して、ピイピイわめく。熊木が止めて、紅茶を入れた。

「文武両道ってさ、凄く大変だよ。見えにくいけど、有理ちゃんは頑張ってるんだと思う。」

そこまで言って、今日は観たい映画がやるんだと、熊木は紅茶をテーブルにならべてテレビをつけた。

「ねえ、ほら。今日はジャッキーの酔拳だよ？こっち座ってゆっく

り観ようよ。」

熊木は猫の刺繍が入った座布団を引き寄せて、ぼんぼんと叩く。

「……わかったよ。」

水周りを綺麗にしてから、エプロンを脱いだ。座ると、ジャツキー扮する青年の厳しく頑固な父親が、薬を処方しているシーンだった。

第十三話

秋になって、お袋から連絡があつた。正式に、親父と離婚を決めたらしいって。

以前から聞いていた話だったから、それほど衝撃は無かつた。ああ、やっと離婚して落ち着けるようになったんだな、と思つていた。

でも、そのメールが来て次に有理がうちに来たときにその話をしたら、有理のやつ。

「私がミッチーにお金出してもらつて一人暮らしするから、早く離婚してよつてお願いしたの。」

悪びれる様子もなく、笑いながらそういつた。

「ほら、ママ私たちが落ち着いたら離婚するつて言つてたから。いつまでもくつついてるとさ、私からしてもヤなんだよね。ミッチーのママさん達もオヤジと早く縁をきつた方がいいつて言つてるし。」

横隔膜の辺りに、真つ黒な、熱い何かがとぐるを巻いた気がした。

俺だつて離婚してお袋がDVから解放されるのは大賛成だ。出来る限り手伝いをしたいと思つているし、引越しかに入り用な金額ならある程度出したつていいと思つている。

でも、有理がそれを笑いながら言い放つのが、たまらなく腹立たしかった。

後頭部の皮一枚下に、目から入つた光が当たつてフラッシュバックみたいに昔を思い出した。

この感覚は初めてで、それはてつきりもう二度と思ひ出すことなんて出来ないと思つていたような、無かつたことになっている昔の思い出だつた。

幼稚園か、小学生の低学年か。親父が俺に暴力をふるつているのに、お袋が怒り狂い、幼い俺と姉貴と、有理を三人引き取つて離婚しますと叫んでいる思い出だ。後にも先にも、天然のお袋が声を張り上げて激怒したのはこれしかない気がする。

感光してフィルム焼けしたみたいに、白くばやけた光景だった。

それにはまだ続きがある。

俺と姉貴は、激怒するお袋にしがみついて泣き、震えながら離婚しないですて頼み込んでいた。有理はそれこそ小さいから、よく意味がわからずにただ泣いていた。

俺たちだって有理と違いは無く、よく意味もわかってなかった。ただ、リコンという言葉が不吉な何かで、自分の状況も把握しきれない子供の俺たちに降りかかっている現在の苦痛よりも、リコンが全部を持っていつてしまいうような、もっと不吉で恐ろしい何かを持つてきそうな気がしたんだった。

ただその本能的な恐怖だけで、お袋の足に必死にしがみついて泣き喚いた。

お袋は三人を抱きしめて、頭を撫でて、そして泣いた。

そうだ。それ以降、お袋からは離婚の話をしなくなった。それこそ俺がある程度の歳になってからは、痣だらけの俺に愚痴のようにこぼす事はあっても、俺たちが成人するまではと頑張ってきたんだ。

有理、お前は、それを、嗤うのか。

思い出が視界を支配して目の前が白く染まった瞬間、とつさに手を出していた。

ぱん、なんて笑っていた有理の頬を張っていた。

「な、なにすんだよ!!」

咄嗟の事にしばらくあっけに取られてから、有理は立ち上がって猛然と蹴りかかってきた。聞き取れないような、呪いの様な罵詈雑言をひたすら投げつけてきながら。

「利用するだけ利用して、テメエがそれを言うんじゃねえ!!」

例えそれを覚えていなくなつて、お前はお袋の苦勞を見てきているはずだが。

有理はあつという間に俺の胸元へもぐりこんで、駄々っ子のように殴り、蹴りかかってくる。よくもまあ、そんなに悪罵を吐けるもんだと冷たく思いながら、もう一度腕を振り上げ、熊木の静止の金切

り声で拳を緩めた。

「出ていけ。」

「言われなくても二度と来ねーよ！死ね！」

有理は転がっていた荷物をかき集めた。そして。

「すぐに手を出しやがって！オヤジそっくりなんだよ！！」

吐き捨て、出て行った。

「……………なんで、急に……」

熊木の震える声に「知るか。クソ……」と一人愚痴た。

有理に蹴られた場所は痛くなかった。でも、あの叩き伏せられた冬を思い出すほどに、やたらと熱かった。

仕事についてからの一年は本当にあつという間だった。

また年が明けて二週間ほどしてから、去年のように祖父母に挨拶に向かい、少し落ち着くのはそれからだった。

去年と比べて寒い冬だったけど、それでも雪は降らなかった。ただ雨なんかが降ると早朝に道路が凍結して、傾斜の急な坂の上にある物件に行くために車を降りて十分近く歩くとか、そんなのが多かった。白い息を吐きながら、こんなにタイムラグがあると泥棒なんてとうに逃げちまうだろ、なんていつも思った。

これで雪が降ったら一体どうなることやら。

そうこうして一月も末の頃に、綺麗な封筒が一通届いた。

開くと、ここしばらく忙しくて疎遠になっていた雄一からの招待状だった。

同封されていた手紙には、雄一が目標にしていたプロダクションに合格したことで、卒業公演をやるからみんなで来てほしい、とあった。

なんでも、実力が評価されて三人の主役の一つをもらえたとか。

「凄いね雄一さん。行くんでしょ？」

「ああ。休みとっておく。」

肩越しに覗き込んでいた熊木は歓声をあげた。養成学校とはいえミュージカルのような劇を観るのは初めてだって。俺だってそうだった。

公演は二月の第二週、土曜日だった。開演は十時。

理由はないけど……。池袋なんてすぐなんだから、出来るだけギリギリに行つてやろうかと思つていた。

でも、六時に起き上がった熊木が遠足にいく子供みたいにどたんばたん暴れまわる音がうるさすぎて、結局七時には起きる羽目になった。

おちつけと、文句の一つも言おうかと思つたけど、弁当一式まで準備していつ出発するのか目を輝かせている熊木を見て、やめた。

俺が起きてやつと着替えが済んだ頃、やあやあとこれまたテンションの高い裕子さんが来た。もうすぐにも出ようと、二人して騒ぎ出した。うるさい事この上なくて、結局自分の中で立てていた時間より一時間半ほど早く家を出る羽目になっちまった。

一時間半ほどの公演を、昼を挟み二度するらしい。

同じ公演を二度する理由は、劇に選出された二十五人のなかでもとりわけ実力がある数人を主役に回すためらしい。

パンフレットにある簡単なストーリー説明によると、歌手を目指す幸音さちねと出会い、幸音によっておおよそ無理矢理そのオーディションに付き合うようにされた二人の青年の話らしい。図書館司書を目指す順平と、図書館に良く通う少し変わった喜一。

「さっちゃん、主役の女の子も幸音っていうんだって。」

「うん、これは運命を感じるね。」

「原島君は第二部の順平役だってさー。第一部だとオーディションを受けた人、この役で、歌を歌うみたい。」

「こっちも楽しみだね。」

きやいきやいと二人ははしゃいでいる。俺は、というと素直に祝福したいし、作品を楽しもうと思つている反面、少しだけ見に行くのを躊躇う気持ちがあった。

「でもさ、原嶋君お調子者なところあるから、喜一の方がはまり役じゃないって思う。」

「ああ、それは少し。」

「……だから敢えて順平役にしたんだってさ、演出が。」

「へえー、じゃあ高く評価されてるんだね。」

「原嶋君凄いねー。」

「……そうだな。」

「元気ないけど、どうしたの治ちゃん？調子でも悪い？」

後部座席で裕子さんと騒いでいた熊木がひょこりと顔を出した。ピーパーとか、そういう動物をふと思いつくさだ。

「なんでもない。」

「ん、そっか。」

一度俺に笑いかけ、ひょいと首を引つ込める。また裕子さんと熊木はわいわい騒ぎ出した。

そうこうするうちに目的地に着いた。雄一のところの養成学校で借り切っている会館はちよつとしたお祭りみたいになっていた。一回の広場ではいろんなものが売っていた。三人で話をして、一つ手ごろな花束を買った。

招待状を受付に見せると、一般客よりも少し早めに入ることが出来た。一般入場よりも三十分ほど余裕があるから、控え室の方へと足を向ける。

達筆な筆文字で、一文字五十センチくらいの、控え室、と掲げられた部屋の前には職員らしき人が立っていた。一直線に三十メートルほど続く控え室前廊下には、びっしりと花が届いていた。

「ちよつと花束小さくないか？」

「大きさはともかく、気持ち的には負けてないし。てか勝ってるし。」

「……」
けらけらと熊木は笑った。イーコト言った！なんて裕子さんも。

職員に話をしたら、案の定控え室には入れてくれないということらしい。二十五人の出演者全員の関係者が入ったら、公演前にパニッ

クになるからだ。

「じゃあ、この花束を原嶋雄一と、出演者のみんなに。」

職員と二、三の掛け合いをして戻ろうかとしたとき、タイミングよく共用トイレに出てきた雄一と、ばったり会った。自分で呼んどいて雄一のやつ、それこそ鳩が豆鉄砲食らったようなきょとん顔だった。

「なんだよ妙な顔して。」

「いや、治のことだからギリギリに来るんじゃないかって思ったんだ。」

「…そのつもりだったんだけど、熊木がな。」

苦笑いし首をかしげた俺を、そして熊木を見つめて、あはははと雄一は盛大に笑った。

「熊木ちゃんはホントにいいコだな。偏屈な治にぴったりだと思わず。」

似つかわしくないことこの上なく、気障にばかりとウインクして笑ってみせる。熊木は小さく笑った。

「きもいぞ。それに、そんなんじゃないし。」

「全くお前は…」

雄一がトーンを落とした、そのタイミングで控え室から顔を出した演者の一人が雄一を呼ぶ声。ああ今行く、と返事を返して雄一は頭を掻いた。

「まあ、いいか。……とにかくさ、精一杯やるから楽しんでくれよ。」

「ああ、期待してる。」

直角に腕を曲げ、出征前の敬礼のようなしぐさをしてから、雄一は走っていった。

ステージが開放されると、熊木は一目散に走っていった。職員が鋭い視線でもって走らないでくださいと、もはや影も残さぬ熊木にじやなくて、取り残された俺と裕子さんに言ってきた。

観客席を探すと、熊本はど真ん中の最前線の席を三つキープして、
してやったり顔だった。探す俺たちに大きく手を振ってみせる。後
ろからどんだん入ってくる他の客のことなんて意に介さずに、これ
でもかと大きく盛大に。

「とりあえず恥ずかしいからやめろ。」

「まあまあ、さっちゃんも嬉しいんだよー。席取りでかしたさっちゃん
！」

びしいなんて親指を立てる裕子さん。

「はい、でかしちゃいました。」

受けて敬礼する熊本。

ちよつと待ってくれ、すぐ後ろの席までぎつしりと観客がいるんだ。
最前線に立ちつばなしで何をやってるんだよ。

「……とりあえず、座りなつて二人とも。」

俺は隠れるように、椅子に横に座る勢いで、もたれかかった。二人
は興奮冷めやらない様子で。でも、後ろからの視線をぐるりと見渡
し小さくなつて座つた。

五分ほどして開演のベルが鳴つた。

まずはじめは全員そろつてのダンスと挨拶からだつた。専用のシ
ューズをはいているらしい。最前列だから尚更か、一人ひとりの歌声
が、ダンスタツプの音が、固まりになつて体にぶつかってくるよう
な感覚。

ステージからもれるライトアップの熱もあつて、どこか初々しさが
見て取れたものの、首筋がぞくぞくするほどの演技だつた。

簡単な流れはパンフレットにあつたとおり。第一場面が図書館。第
二場面はオーディション会場。第三場面は空になつた会場跡。

幸音が歌オーディションのトリの順番で、実際に幸音の前の演者は
それぞれが自分で選んだ曲を披露した。順平たちは第二場面では観
客という立場だ。

合間にオーディション側の不都合があつて鬼ディレクターが技術や

司会進行のコンビに檄を飛ばしたりする。

最後の幸音の歌う時になって停電という一番のアクシデントに見舞われるものの、幸音は停電で使えないマイクではなくてアカペラで歌う、という話だ。

身内の鼻肩目、じゃ無いけど、やっぱり雄一の歌は参加者の中で一、二を争う程巧く聞こえたし：第二公演では順平の声は通っていたし、それに心がこもっている様に見えた。

俺は、無意識に、苦笑していた。

雄一は、いつだって隣にいた。胸を張っていえる、信頼できる無二の友人だ。口にはとても出せないけど、あいつが言ったように、俺も雄一を親友だと思ってる。

出演者は舞台栄えする分厚い化粧をしているらしい。最前席から見ていると、やや伏せ顔に影がかかったときに奇妙なほど表情が浮き上がって見えた。

舞台役者には皆、ターンをするたびにきらりと軌跡を残すような、新鮮な華があった。伸ばして回転する腕がどこまでも伸びていって、舞台を撫ぜ回るように見える。

いくなれば、知っている雄一との違和感と、羨望と、ちっぽけな嫉妬。

大団円の締めダンス。雄一のシングルパート。

「この男の子は良い声を出すなあ。」

どこからか、そんな呟きが聞こえた気がした。

苦笑は自分の馬鹿さに、だ。

雄一は一直線に目標に向かっている。それは昔からのこと。

足下ばかり見て、立ち止まって、ちっぽけに必死に自分を守ろうとしていた俺が真っ直ぐに雄一を見ることが出来たのは、その眩しさがあつたからだ。素直に雄一を尊敬して、応援したいと思ったからだ。

舞台の雄一は、生き生きしていた。

『あの、マイクを使わないで歌っていたときに、体に歌が入ってく

る気がしたの。』

舞台の幸音のセリフ。

幸音はオーディションに落ちてしまつ。でも彼女は、悔しいと泣きながらも自分の成長を実感していた。

きつと、雄一も幸音と同じ感覚なんじゃないだろうか。

きつと、雄一は今、楽しくて仕方ないに違いない、と思った。だって雄一の奴、役を演じているって言うよりも喜びを体現してるって感じだった。

舞台の上にならずらりと、二十五人が列を作る。手を繋いで、曲の最後のリズムに合わせていっせいに礼をした。

嫉妬なんてお門違いだ。馬鹿だな。

隣の熊木が、ぽんと肩を叩いてきて…咄嗟に、立ち上がってしまった。

俺が雄一に並ぶのはここじゃない。ここで上を向く雄一に並ぶために俺がしなきゃならないのは拍手をした。それこそ掌から火花が出るんじゃないかってくらい目一杯の拍手を。

しなきゃならないのは、心からの祝福と、その背中を押してやることだ。雄一が要らない心配をしないように俺が俺自身の場所です精一杯働くことだ。

一人二人と周囲の観客が立ち上がっていくのがわかる。霧雨から一瞬でスコールとなったスタンディングオベーションの中、最後に代表の演者の挨拶があり、幕がゆっくりとおりた。

観客席のライトアップ後すぐに三人で控え室に駆けていった。走らないでくださいっていう職員の手を後ろ髪に聞いて、三人で顔を見合わせて苦笑した。

雄一に、感謝と祝福と、これからのプロダクションでの応援をしたかった。

いざたどり着いた控え室の前では、演者たちが講師を中心に輪になつて万歳三唱をしていた。それが終わると、女の子数人が感極まっ

て泣き出して、お互いに抱き合っていた。

「……帰ろう。」

その鮮やかな感動を、俺たちが祝福の言葉で色褪せさせてしまうわけにはいかない。

今になって思えば、彼らの様に眩しい涙が溢れるほど熱心に、中学高校と過ごしてこなかったのが寂しく思えた。

「雄一には後でお礼を言えば良いや。邪魔するのは野暮だ。」

「そうだねー。」

「そだね。きつと打ち上げるだろうし。」

二人も、少し残念そうに、そして俺と同じように眩しそうに目を細めて雄一たちを見つめていた。

「美味しいものでも食べて、帰ろう。」

二人は一転、やったーなんて万歳三唱した。周囲の冷たい忌諱の視線を浴び、首をすくめて、びっくりするほど現金だなあと少し呆れた。

第十四話

春になって、お袋から、有理が熊木の後輩として看護学校に入学したことを聞いた。それをもって離婚の話をつけ、正式な流れで、お袋が実家に帰るということになったということだ。

熊木はあれからも有理とはやり取りしてるようで、俺がなんとも言えない顔をするのを知っていて尚、何とか仲直りをさせようと有理の話をしてきた。

正直、今になってしまえばあのことについて腹を立てているというほどでもない。

有理は、そういう奴なんだってことはもう随分前からわかってるつもりだった。

俺は、親父が泊り込み当務の一日、前もって休みを取って車を飛ばして実家へ帰った。

お袋が富山の实家に帰ってしまうとなると、あの日家から持ち出さなかった私物を始末するなり、今のアパートに運び込まなきゃならない。

親父が建てた家、という意味での俺の実家に帰るのは、あの日追いつかれて以来初めてだった。

趣味で音楽をやっていたお袋のグランドピアノも、多くの荷物も、めばしいものは大概運んでしまったりまとめてしまったりしたようだ。

二年前の記憶よりも生活感が無い実家は、酷く広かった。

とりあえず、自分の私物を探しに二階の部屋へ向かう。壁に貼られたポスターも、机も、綺麗に掃除してあった。

お袋がいつも掃除してくれていたらしい。本棚に残っていた小説も漫画も黄ばんでいない。陰干しまでしてくれていた。

結局荷物を見てみたら、コンポは有理が谷口の家に自分用に持って行っちゃったとか、ベッドは持って行っちゃったとか、それこそ本

棚と本と、少しばかりの服以外は私物なんて残ってない。もつとも、姉貴の私物もそうらしい。

お袋が申し訳なさそうに謝ってきた。筋が違うだろうに。とりあえずつめるものはすべて車に詰め込んだ。おんぼろの中古車はギツチギチに腹いっぱい、帰りにパンクするんじゃないかって少し不安なくらいだ。

最後に自分の部屋の窓を開け放つ。

吹き込む一陣の風。

今でも懐かしい、固まっていた空気が全部ベランダの向こうに押し出されていった。

春の風は、ザンコクだと思う。

これで、この部屋はオレノヘヤじゃなくなった。

不必要、と判断した昔の教科書、細々とした小物を分別し、まとめてゴミにした。予想以上に時間を食って、お袋の車に積んでゴミ集積所に持って行き、帰ってきたら日は沈みかけていた。

「お疲れ様。」

端が少し欠けた、昔からある焦げ茶色の急須でお袋は緑茶を入れてくれた。

「お袋も……お疲れ。」

お袋は茶葉にはこだわらない。というか玉露を買ったこともないかもしれない。何とかブレンドとか、聞いたこと無い茶葉ばかり買ってくる。

一口、すすった。

……でも、なぜか毎回同じ味がする。

これもお袋の味だな、なんて、凍り付いていたノスタルジアにかられた。おかしなもんだと思う。

「有理のこと叱ったんだって？」

しんみりと空を眺めていた俺に、お袋は静かに囁いてきた。

「……。」

「熊本さんが止めてくれなかったら殴られていた、って文句を言っ

ていたわ。怒られた、って。」

「…それは。」

「わかってるわ。怒ったんじゃないって、叱ったんでしょ。…」

「…原因は離婚のこと？」

お袋は、ぼんやりしているけれど、それでもしっかりしているときはナイフのように鋭い。

「はい。」

お袋は、静かに一口お茶をすすった。

「…見て、茶柱が立ったわ。」

そして、ふふふ、なんてお袋は無邪気に笑った。

「有理は、治から見たらいい加減に見えるかもしれないわね。言い回しも誤解を与えやすい。でも、いろいろ考えているのよ。それに最近は本当に頑張っているわ。勉強も、部活も頑張っていた。時々浅慮なことをしてしまうけれどね。」

「はい。」

「私がどうだ、なんてことは気にしないでいいの。……でも、富山に帰ってしまうのは、少し心配。昔から、治は頑固だからね。有理のことを許せない時もあるでしょう？それに、有理も頑固だから悪いと思っても自分からは謝らない。」

お袋が言うことは、まるで熊木が俺に言うことそのままのようだ。

「はい。」

「有理はこれから一人暮らしするってアパートを借りたの。バイトもするらしいけれど、足りない分は谷口君が出してくれるって言っていたわ。谷口君がこっちに帰ってくる二年後まで、専門学校とバイトの二足の草鞋で、アパート一人暮らし。」

確かに、私も向こう見ずだって思うわ。治の苦労を知っているだろうに。なんてお袋はゆっくりと目を閉じた。

「治、有理のことを許してあげて。昔から、有理のことを厳しく見ているのは私も知っていたわ。でもね、私から見て、治はただ厳しくしているんじゃないってわかってるから。有理が我を通したら

叱つてあげて、それから許してあげて頂戴。お願いよ。」

「わかった。有理のことは出来る限り許せるように努力する。」

「よかった。」

少し力が入っていたのか、ほうと一息つくのと同時に、お袋の肩が下りた。

お袋は小さくなった。正月に会っていたけれど、こうしてゆっくり話をして痛感した。

二年は恐ろしく、長い。すべてが変化していくには充分すぎるほどに。

「……………お袋。」

「なあに？」

「その……………この間、昔のことを思い出したんだ。少し。」

お袋は急須に残っていたお茶を、俺と自分の茶碗に注いだ。そしてゆつくりとこつちを見返し、頷く。

「すぐえ小さい頃にさ、離婚するって言ったお袋に、俺と姉貴で泣いて縋って、離婚しないでくれって泣いただろ？」

「そんなことも、あったわね。」

思い出したのか、お袋は、すいと目を細めた。

「俺さ、まだ迷惑も、心配もかけるかもしれないけど。……………しつかり働いてるから。いつだったか、適当に生きてお袋より後に死ぬとか言って悲しませちまったけど、俺は今、生きていたいって言えるくらい幸せだっと思えるから。」

お袋が手に持っていた茶碗の水面が、幽かに揺れているのが見えた。
「だから少しだけ、安心してくれていいからさ。これからは俺たちのためじゃなくて自分のために生きてくれよ。」

「はい……………ありがとう、治。」

ゆつくりと、更に一口お茶をすする。そして一つ頷いた。

「そうね、あと一つの心配事といえば、熊本さんのことかしら。有理が言うには仲良くやっているんでしょう？」

心配だわ。結婚はいつになるのかしら。呼んでくれるのかしら。お

袋は小さく微笑んだ。

「あいつはそういうのとは違って…」

「治。」

今度は静かに、叱り付ける口調だった。

「そういうのとは違って、遊びだともいうの？今でも、本当にそういうつもりはまったくないの？」

「いや……俺は……」

お袋は、そんな俺を辛そうに見つめて、それから無理矢理笑って見せた。

「結婚は辛い事も多いけれど、幸せなことも沢山あるわ。私も、裕美と、あなたと、有理を産めた事を心底嬉しく思うわ。あなたたちが立派になってくれて、とても幸せ。」

私が言うと、いまいち信じられないかしら？

冗談めかして、お袋は付け足した。

「そんなはず、無いだろ。」

「付き合うのも怖いって思うのは、あの人みたいになって熊本さんを傷つけてしまうのが怖いからでしょう？大丈夫。その、熊本さんを大事にしたい心があれば、きつとうまくいくわ。」

お袋は微笑んだ。ああ、この人には一生敵わないんだろうなあと、思う。

「でもね、そろそろちゃんとしてあげないと、熊本さんが可哀相だわ。きつと不安よ、彼女。」

「……………まあ、適当にやるから、お袋はわざわざそこんところは気にしないでいいって。」

「そう？うふふふ、じゃあ、好い加減にしておきなさいね。」

「大きなお世話だ。」

ふふふ、なんて、お袋は本当に楽しそうに最後に笑った。

第十五話

軽く夕食をご馳走になり、家に帰る。

大荷物を担ぎ上げ、玄関の鍵を開けると、やけに家は騒がしかった。

「ただいま。熊木、どうかしたのか？」

「う、ううん、なんでもないの。」

ばたばたと居間から駆け出してきた熊木は、大げさすぎるアクションで、わあ大荷物ね。と驚いて見せるなり玄関に駆けつけた。

荷物を降ろして、真っ直ぐに熊木のことを見つめると、熊木は露骨に視線を泳がせてみせる。

「……隠すなら、まず靴をどうにかしろよな。」

「んあっ！」

俺の言葉で熊木はびくりと体を震わせた。玄関には俺と熊木の靴以外に、二人分の靴がそろえてあった。

「有理と谷口君か。」

「あのほら、私がピザ食べたいなーってなって、でも一人で女の子がピザ頼むの恥ずかしいし……。だから、」

「別に言い訳しなくていいって。」

荷物を全部玄関先に運び込んで首を曲げると、ごきりごきりなんて盛大な音がした。運動不足のつもりは無いんだけどな、なんて思う。玄関付近を俺が占領しているもんだから、有理たちは仕方なく居間で大人しくしているらしかった。

「悪いな、熊木。余計な心配させて。」

少し挙動不審気味の熊木の肩をぽんと叩いた。

「ううん。」

「少し話をしたいと思っていたから、ちょうど良かった。」

「え？」

不安げに柳眉をゆがめる熊木をそのままに。廊下をまっすぐに歩いて、居間の引き戸を開いた。同時にタシーンなんて勢い良く、居間

から続きの寢室の襖が閉じる。居間はもぬけの空だった。

有理はどうやらこっちの顔も見たくないらしい。

「谷口君、いるんだったらちよつといいか？」

有理が俺の話を聞かないのは大体予想がついていた。

「真面目な話をしたい。有理は聞きたくないだろうから、二人だけで。」

襖の向こうでは、有理と谷口がなにやら話をしているらしい。ごしよごしよと襖越しに声が漏れ聞こえてくる。

間。そして、すらりと襖が開いた。

一人で出てきた谷口は緊張した面持ちで会釈を一つ。俺が示した正面に、座った。

「熊木、少しだけ席をはずしてくれるか。有理を連れて。」

後ろの引き戸から、不安げにこっちを見つめる熊木を手に取るようにわかった。きっと、巨人の星の飛雄馬の姉みたいに。俺の頼みを聞いて、少しだけ戸惑っているような気配がして。

「大丈夫。たぶん、取って食ったりはしない。」

振り向かずに肩をすくめた。後ろで小さい吐息の音が聞こえる。

「わかった。」

衣擦れと足音が遠ざかっていく。玄関のドアが閉まったのもわかった。

「悪いな、谷口君一人居残りさせて。」

「い、いえ。」

ぶるぶると、谷口は大きく首を振って見せた。有理が隣にいるときはもっと、こつ、無機質なイメージがあった。でも今は動揺が手に取るようにわかる。

「別に固くなんなくていいからさ。たしか谷口君は有理と、親父に挨拶に行ったんだよね？」

「はい。去年の夏ごろに…一度…挨拶に行きました。」

「そうか。」

こっちの質問の意図がはかりかねないせいか、彼の返答は歯切れが

悪い。

「たぶん、親父は酔っ払って何も言わなかっただろうし……そもそも何も言わないから、俺がと思って、な。」

たっぷり一呼吸。何だかんだ言って、俺も相当緊張しているらしい。手のひらに汗をかいているのがわかる。顔に出ないのはせめてもの救いか。

「俺は正直、有理のことをあまり好きじゃない。」

一瞬だけ、谷口の視線が鋭くなったのが、良く見えた。

「有理は昔から、誰かにうまく頼りながら楽そうな選択ばかりするやつだった。最近だと柔道部の関係者が看護へ誘ってくれたっていうのに、誘いを蹴った。学校に受かって通うのも、谷口君が帰ってくるまでは実家で良いだろうに一人暮らしを始める。」

「お兄さん、それは……」

お兄さん、か。

「そんな、俺を取って食いそうな眼をすんなって。もう少しだけ、聞いてくれ。」

手をひらつかせ、場の空気を何とかしようとしてみたが、谷口はだいぶ熱くなりかけているようだった。

「俺から見たら、それもこれも逆に大変な進路ばかり取っているように思えてならないんだ。太い縁も濃いゆかりも無い人が、進路の手助けをしてくれるっていうなら、これからの人付き合いの幅が広がって良かっただろうし、未成年の有理が成人するまでの二年間をバイトと学校にと駆けずり回り、しかも一人暮らしするなら、窮屈でもあの親父に世話になってるほうがいいだろうとか。」

親父は金銭的な意味でも、有理には協力を惜しまないんだから。そこまで言ったとき、ついに堪えられなくなったのか谷口は身を乗り出して口を開いた。

「聞いてください。有理がそっちに行かなかったのは俺のお袋が看護師で病院側から学費を援助できるからで、一人暮らしをするお金も、足りない分は俺が出せるからです。有理はそういうこともちや

「んと考えて……」

「だから、だ。」

「……え？」

これから言おうとしていることを、頭の中で一気に洗い直し、組み立てる。

「俺は口下手だから、うまく解釈してくれ。」
なんて前置きをした。

「今、有理は金銭面でも精神面でも、谷口君を頼ってる。それ自体は悪いことじゃないと思う。ただ有理はその意味に気付いてない。」
人に投げかける言葉じゃないようだ。組み立てたこの言葉は、そのまま自分への説教のようだ、なんて思う。

「あいつは結局、いろいろな方向から自分を支えてくれる糸を全部断ち切って、一本だけに縋ってるんだ。」

とやかく言っても、俺が今まで気付かなかっただけで、俺と熊本の関係も全く同じだ、と思う。

「有理はたまに視野が狭くなる。それにわがままだ。これから付き合って行こうとするともっと我を通すかもしれない。谷口君はそれを飲み込めるつもりなのか？もう、金銭面も精神面も責任を取れるのか？」

「取れます。自衛隊から帰ってきたら、結婚を考えています。」
少しの間も開けずに、谷口はそう返してきた。いつの間にか、その目に燈っていた険はなくなっていた。

それは、見返すこつちがやるせなくなるほど愚直に、真摯に見えて、思わずこつちの口元が緩んだ。

「そうか。親父の代わりといったらオカシイけど……。」

座布団の上で正座をしながら。背筋を伸ばして、改めて谷口を見返す。

「有理のことを、宜しく頼む。」

深く、頭を下げた。

「はい。全力で護ります。」

谷口も、正座しなおしてぺこりと頭を下げた。

今でも有理のことは、嫌いだ。そのスタンスにはいつも苛立たされる。でも、有理はいつだって、どこかほっとけない妹だった。

いい加減で、なんだか投げやりで、浅慮で。勉強も十段階評価で三とか、四ばかりでも気にも留めなかった有理。

でも今、看護師になる目標に向けて努力し、そして看護学校に受かったっていう事実は確かなものだから。

そこまで頑張れる夢を持った有理を。有理を支え、変えた谷口のことを、一度心底信じてやりたくなった。

「……どっかの洒落た偉人が言ってたな。結婚は宝くじみたいなもんだって。」

この空気がむず痒くて、思わず軽口を叩いた。

「……夢と希望が詰まっているって話ですか？」

「ごく稀には、当たりがあるって話。」

三秒ほど沈黙。それから谷口は笑い出した。

「今それを言うのは反則ですって。」

「二人のは、きつと当たりだろ？」

「はい。」

自分で言っておいて苦手な空気を作っちゃったと、手持ち無沙汰で冷め切った残りのピザを口に運んだ。

……冷めたピザは人間の食べ物じゃない。

その顔を見て、温め直してみんなで食べましようと言った谷口は有理に電話をかけた。

谷口から何か聞いたのか、最後に有理は「余計なお世話だバカアニキ。」なんて言って帰っていった。

ひとしきり後片付けを済ませて、薬缶を火にかける。引き戸の向こうでは映画、アメリカが流れている。熊木が食い入るように映画を観ている。

閉じた引き戸越しに、ヴァイオリンの音楽と、語り手の飄々としたナレーションが聞こえてくる。

台所の隅においてある椅子に腰掛けて、目を瞑った。

モノローグ／優しい憎悪、甘い涙／最終話

ゆつくりと、今残っているすべての思い出を引き出した。

そしてさっきの、自分への説教を反芻する。

人間の根っこは善から来るのか。悪から来るのか。そんなこと知らない。

少なくとも昔から、俺の根幹を作っていたのは憎しみと意地だった。思い出せない過去という脆い足場に恐怖し、他人を羨望し、必要以上挫折し、しまいには妄執に駆られ、すべてを嫌悪し、自分に憎悪を抱き、悲壮に塗れて逃げたくて。でも、意地を張っていた。確かに、俺にはそれっきりだったと思う。

ゆつくりと、思考を回す。

思い出のスタートは大半が中学からだ。それは今でも変わらない。でもそれから数年間のことはすべて鮮明に覚えている。

あの臍を噛む思いの日々。

自分の情けなさ。

一人暮らしへの期待と不安。

親友の言葉。

自分の不甲斐無さ。

真珠の涙。

人生の師の励まし。

熊木との出会い。

やりがいのある仕事。

家族への想い。

一人きりだと思い込んでいた俺の回りでも、一本ずつ糸は伸びて、周囲と結びついていた。

今は信頼できる親友がいて、胸を張れる。仕事に目標を掲げることが出来る。

それに…

タイミング悪く、パイパイと薬缶がわめき散らした。

「わかったわかった。」

火を止めて、紅茶を入れる。引き戸を開いて居間に入るなり。

「遅いよー。出合いのシーン終わっちゃったし。」

薬缶より騒がしく、ぶつぶつと熊木はわめき散らした。

「悪かった悪かった。」

紅茶をならべて熊木の隣、指定席の猫の刺繍入り座布団に腰を下ろした。

熊木は熱心にアメリを見ている。

その横顔を見て、胸にじわりと湧く想いが確かにある。

「ん？どうかしたの？」

熊木は俺の視線に気付いて、子猫みたいに目を丸くした。

「なあ、熊木の実家ってどこなんだ？」

「……え？なんで……そんなこと急に？」

満月のような目、不安そうに垂れ下がる。

「いつまでもこのまま帰らないって訳にいかないだろ。よかったら

…」

俺の言葉が終わるよりも先に、熊木の見開かれた瞳にどろりとした昏い色が満ち、それと同時に俺の肩辺りを、熊木の拳が打った。

「う…」

「なんで！」

「ばしん、と二度、びしり、と三度。」

「お、おい、熊木。」

「なんで今になってそんなこと言うの？」

「ばしり、と五度、ずん、と七度。」

「ちよつと待てって。」

「じゃあなんで今まで玄関を閉めなかったの！？」

熊木はもう数え切れないほどめちやくちやに腕を振り回す。予想外なことに、それは有理の蹴りよりも重たかった。

「それならなんで…私が帰ってこれるように鍵を開けていたのよ…」

握っていた拳がするりと解ける。そして熊木は顔を覆って小さく丸まり、泣き崩れた。

「話を最後まで聞けって、熊木…」

肩に置いた手が、横薙ぎに払われた。更にトーンを上げて、ううう、と熊木は体を真珠貝のようにこわばらせる。

言葉選びを間違ったな。畜生。昔から口下手なんだよ。

「倅音、たのむから話を聞いてくれ。」

嗚咽が止まった。倅音は手で半分以上隠しながら、涙でぼろぼろの顔を幽かに上げる。その真つ赤な眼は、光の一切燈っていない黒目は、警戒しながら様子を伺う猫科の動物のようだった。

初めて出会った夜のことを、思い出した。二人とも眼を真つ赤にしていた公園の夜を。

どんな表情になっているかわからない。でも、今夜の俺は努めて優しく微笑んでみせた。

「倅音、よかったら俺とちゃんと付き合って欲しい。」

ゆつくりと手を伸ばした。顔を頑なに護っていた倅音の手をどけ、その頬に触れる。

「倅音のご両親に挨拶しに、実家に一緒に帰ろう。」

一番初めはおかしな奴だと思った。そして俺とよく似ていると。だから、助けたいと思った。

一緒に暮らすうちに、いつの間にか吸っては吐く、無色透明な空気のようにさり気無く、無くてはならない女性になっていた。偏屈で凝り固まり尖った、不恰好の刀を包む鞘のように。

緊張しきりで、口元が引き攣ってるのが自分でわかる。掌から伝わってくる柔らかい感触と温かさが、一秒ごとに俺から冷静さを奪い取っていく。

「う、ううううう…」

倅音の搾り出すような泣き声と共に、ぼろりと一際大きな滴が流れ

た。

「俺じゃ駄目か？倅音……？」

満月のような涙をぼろぼろと零しながら、倅音は小さく首を振った。

「ずるいよ治ちゃん……そんな顔して。」

すい、と顔が近付く。

私のほうが、ずっとずっと待っていたんだから。

吐息の音が終わると同時に、柔らかい唇が重なった。

頭の芯がゆるゆると溶けていく気がする中で一つ。

ああ、甘い涙というのも、あるんだなあと、思った。

終幕

モノローグ／優しい憎悪、甘い涙／最終話（後書き）

最後まで付き合っていただき、誠にありがとうございます。

空想の物語。

これを、夢物語だと、今尚苦しんでいる人がどこかにいるかもしれない。

そう、これは盥の空想の物語。

でもきつと、治たちは生きていた。

もし、あなたが、自分に負けそうだったなら。

もし、あなたが、治のようにすべてを諦めそうだったなら。

『負けないで欲しい』

その一念で、書いたのです。

未熟で、拙いけれど。

これは、そんな貴方達への応援歌のつもりです。

がんばれ。

みんながんばれ。

改めて、最後までお付き合いいただき、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5601c/>

モノローグ～優しい憎悪、甘い涙～

2010年10月14日17時23分発行